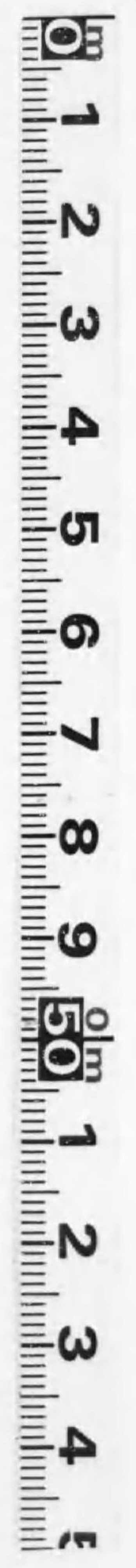


525
296



始



54V100



文學博士 福來友吉著

精神統一の心理

日本心靈學會刊

大正
15. 6. 22
内交

序

昨年の十月上旬、私は日本心靈學會の依頼により山口佛教會館に於て、「精神統一の心理」と言ふ題で、前後三回の講演をいたしました。其の時の速記を訂正して印刷に付したものが本書であります。

精神統一の心理と言ふことは可なり大問題であるのに、それを僅に三回位で講演しようとしたのは随分無理なことでありまして、宗教的統一即ち瑜伽の心理の如きは非常に簡単に片付け、統一と眞善美との關係問題の如きは全く省いて御話しなかつたのであります。併し、之を小さくも一の書物として出版する以上、講演の速記通りにして置くに忍びませんから、簡単に過ぎたものは補足し、省略したるものは新

序

二

に執筆して追加することに致しました。従つて速記の部分に新に執筆したる部分には自然其の文章の調子に異なる所があつて調和を缺いて居ります。其の邊に就ては、讀者諸君の寛大なる御諒察を祈るのてあります。

大正十五年六月箕面山の青嵐涼しき夜

著者

目次

第一章 觀念は生物なり……………一

一 生物の意義……………一

二 觀念の要求ミ力……………一四

三 觀念運動——模倣運動……………二一

四 觀念による生理的變動——精神治療……………三五

第二章 人格の構造……………四九

一 觀念の生存競争……………四九

目次

二 人格の意義……………一六〇

三 潜在觀念……………一六五

四 人格と潜在觀念の競争……………一六六

五 強迫觀念……………一七〇

六 人格の分裂……………一七〇
6.26 K 至 1

第三章 精神統一と能力……………一七三

一 觀念のテレオロジー……………一七三

二 精神統一の意義……………一七〇

三 〇能力の爲の精神統一……………一七四

第四章 精神統一と宗教經驗……………一七六

一 瑜伽の意義……………一七六

二 瑜伽の實行方法……………一七八

三 私の宗教經驗……………一八〇

第五章 精神統一と神通力……………一八〇

一 空間は靈なり……………一八〇

二 神通力者……………一八〇

三 死の知らせ……………一八二

四 念寫の實驗……………一八七

目次

第六章 生命の統一活動……………二六七

一 宇宙は活物なり……………二六七

二 眞……………二九〇

三 善……………二九六

四 美……………三三三

目次終

精神統一の心理

文學博士 福來友吉 著

第一章 觀念は生物なり

生物の意義



第一章は觀念は生物なり云ふのでありますが、是は心理學上の主張として随分大膽な、そして新しい主張であります。私共も嘗ては英國の聯想論者の説に基いて、觀念の身體に及ぼす影響を論じたことがあります。

精神統一の心理

た。あの時代は観念と身體との聯合關係からして、観念が身體に働きかけること云ふことを言つて置いたのであります。けれども其後千里眼問題なごを研究し、又私自身が宗教生活にいそしんだこともありまして、さう云ふ宗教上の經驗と千里眼研究の結果から段々思索して見るに、此の観念の身體に及ぼす働きといふものは、英國心理學者の聯合論によつては到底解決は出来ない。唯「観念は生物なり」と言ふ新理論により、初めてが解釋出来るのであります。從來流行の心理學で一般行はれて居る物心二元論の様に、観念を無能無力のものに見て、身體に如何に働くか云ふことを眼中に置かないやうな、さう云ふ心理學の立場から見ると「観念は生物なり」と云ふことは、極めて大膽不敵な主張であります。けれども私は是は必ず斯うなるべきものと信じて疑はないのであります。さうか、私共がこの主張を如何

に論ずるかを、十分御理解なさることを希望するのであります。

先づ此の新理論を述べるに先立ちまして、生物と云ふことの意義を、一寸申し上げて置かなければなりません。生物といふことを論ずるにも、生理學者が生物を定義する仕方と、私共の生物に對する定義の仕方は非常に違ふのであります。けれども今日、生物學者の定義の仕方なごを茲に擧げて一々批評すること云ふやうな、そんな香氣な時間を持合せて居りませぬ。僅か三回の講演で、大きな問題を扱はふことするのでありますから、可なり無理であります。でありますから、生物學者なごの説を引用して批評することによくの時間を費すことは控えまして、短刀直入的に私共の主張をお話して見たいこと云ふのでありますから、其邊に就ても豫め御承知を願はなければなりません。

然らば吾人の所謂生物云ふことは、どう云ふ意味を有つて居るか。多くの生物學者の生物に對する定義によるに、只血液が循環するに、呼吸があるに、胃腸の消化活動が盛んであるに、云ふやうなことを以て、命云ふ見るのであります。けれども私共は、さう言はぬのであります。目に見ゆる物質上の現象そのものを、直ちに生命と見るに、いふことは、間違つて居ると思ふのであります。諸君が私を見て、私の身體中に血液循環がある、呼吸をしてゐる、腸胃が食物を消化して居る。だから私を生物であると言はれたならば、私は大いに抗議を申込みます。私自身は諸君の目で見ることに出來ない、或る物を所有して居ります。諸君は目で見る限りに於て、私は即ち肉の塊りに過ぎないのであります。血液の循環や、呼吸運動をやつて居る生理的現象に過ぎないのであります。其生理的現象があるから、それ

で生物であるに、私を云はれたならば、私は「否」と答へます。私は諸君が見通して居る所の、重大なるものを所有して居るのであります。それは顯微鏡を以て見るに、出來ない。メートルを以て測るに、出來ないものである。一切の感覺的屬性を超越せる「空性の實在」である。所謂科學云ふものは、空間上の存在相互の關係を論ずるものである。尤も近來は科學も餘程進歩して、現象の背後に、隠れて居るかに云ふことにも觸れんとするやうにならうとして居るやうでありますが、從來の物理學云ふものは、只空間上に現はれた現象相互の關係を論じて居るに過ぎないのであります。生理學もさう云ふ流儀で、肺臓の呼吸運動に、胃腸の消化作用に云ふやうな、空間上の現象を列擧して、それを生命だと言つて居ります。然しさう言ふ定義を、私自身に當て、嵌めたならば、私は大なる抗議を以て「否」

こ答へるのである。生理學者の列擧する生命の現象は、空間上の出來事であるが、私自身は顯微鏡を以て見るここが出來ず、メートルを以て量るここの出來ない、空間超越の空性の實在を具へて居るのであります。それは何であるか。私はそれを要求こ名づけます。次から次へこ或事を要求して、其結果、種々の生理的現象を喚起して居るのであります。生きるこ云ふここは、結局する所、要求が物質上に働きかけて、そこに自己實現して行く過程にすぎぬのであります。只單に物質の運動それ自身が命でない。要求が物質を通じて、自己實現し行く刹那々々のプロセスの流れ、それが生命であります。だから生きるこ云ふ問題は、結局要求實現の問題こ見なければならぬ。

昔から人間は生を求め、死を怖れて居りますが、それは何の爲めであるか。

或人は死んでから地獄へ往くから、死ぬここが厭ぢやこ説明します。けれども死んでから後、地獄や極樂の有るここを一向信ぜない人も、矢張り死を懼れて居る。だから此説明は當にならぬ。或人は死に際に於ける苦痛を考へるこ、死が厭だこ云ふて、死の恐怖を説明します。けれども是も随分當てにならぬ説明であります。若し死に際の苦痛こいふここを怖れて、死が厭であるこ云ふ人があるなら、其人に向つて、樂々こ眠るが如くに死ぬここの出來る方法がありますから、其の方法を授けるこ言つたならば、それなら其の方法で是から死なうこ云ふでせうか。死に際の苦痛を除く方法を教へても、矢張り人間は死ぬこいふここを厭がるに相違ありません。して見るこ、此の説明も當てになりません。果して然らば人間は何の爲に死ぬここを厭ふのでありませう。私に言はせるこ、其の理由は明かなここであり

ます。實現すべく企て、居つた一切の要求が、死に云ふ出來事によつて直ちに斷絶されて了ふ。それが人間に取つて何よりも恐ろしい。それで人間は死を怖れるのであります。人間は生の執着者である。其執着は人間の要求から生ずる。要求の自己實現が、死の出來事によつて刹那に斷絶されて、一切の希望が虚無に歸するに云ふことは、人間にまつて恐ろしいことであります。目に滿つる此の大宇宙、日月星辰山川草木、實に驚くべき魅力を以て吾人を捉まへて居ります。斯の如く魅力ある美はしき大宇宙が、死によりて直に消えて了ふに云ふことは、私共に取りて言ひ知れぬ淋しさを有つて居ります。それでさうしても死ぬことに怖れを有つて居ります。して見れば死の恐怖は、死んでから地獄に行く惧れがあるからか、死に際に於て苦しいからか、さう云ふ理由では到底説明することは出來ない。

それは唯、要求の斷絶に言ふことによりて説明が出来るだけであります。

だから吾人の生命は要求實現の過程の連続である。其各瞬間は單純なる物理的時間の瞬間でなくて、未來に實現すべき要求を孕んで居る瞬間である。物理学で謂ふ様な、空虚な時間の流れでなく、工價値を創造せんとする活動の流れである。斯くの如く生命の現在、未來に要求をかけて居る現在であるから尊いのである。吾人の執着するのはそれが爲めである。死は斯る尊い時の流れを斷絶するから怖ろしいのである。人間の眞實相はそれである。若し人間の存在から此要求を取つてしまつたならば、死は恐ろしくも何でもないものとなる。

所で茲に奇異なることは、死に對する斯う云ふ恐怖が、下等動物にはないのであります。例へば犬のやうなものを、棒で以て擲ぐる風をすれば逃げ

るこゝは逃げます。けれども彼等は死を怖れて逃げるものではない。棒を以て打たれた瞬間の、苦痛を懼れて逃げるのであつて、死をいふ考へで逃げるのではない。是れは下等動物に於ては、死に對する觀念がないからであります。人間に至つて初めて死に對する恐怖が生れて來るのである。これは一寸奇異なるこゝであるから、説明しておかねばならぬ。凡て生命を云ふものは、進歩すれば進歩する程、悩みを伴ふて來るものである。生命の低級な時代には悩みは少ないのである。下等動物には死の恐怖がないのに、人間は不幸にして死の恐怖を持つて居ります。けれども人間は死の恐怖を持つて居るが故に、下等動物よりも生命の深みに入るこゝが出来るのであります。私は人間の魂に悩みを與へてあるを云ふこゝには、深いく天の計らひがあるを思ひます。「智慧多きものは煩ひ多し」ミソロモンが言

つたやうに、人間の智慧が殖えれば殖える程、悩みが伴つて來る。學問すればする程、心配が多くなる。下等動物のやうに、物の道理が分らぬで居つたならば、香氣であらうを思ひます。香氣に暮したいのならば、人間に生れたのは不幸であります。魂が發達すれば、死に對する恐怖が殖えて來る。永遠を云ふやうなこゝを考へる能力が發達するに隨つて、死に對する恐怖心が強くなつて來る。だから死に對する恐怖は、永遠を云ふ理念から出たものである。永遠を云ふ理念を懐くこゝの出來ない猫や犬には死の恐怖がない。私共は一方に於て永遠を云ふ理念を持つて居つて、其永遠の眼で自分の五十年六十年の生命を振り返つて見るを、そこに云ひ知れぬ人生の淋しさを覺えます。だから生きるを云ふこゝは、單純なる物質運動の連續でなくして、要求實現の過程であります。尤も、要求には一日や二日に果せる

ものもある。又五十年、百年、或ひは永遠の要求といふやうなものもありませんが、要するに何處かに要求を云ふものが無くては、生きるに云ふ意味が出て来ないのであります。それで、生物に云ふこの根本は、單なる血液の循環とか、腸胃の活動に云ふことでなくして、人間の眼で見ることの出来ない要求が、生命の根本となるのであります。他人には眼で見ることが出来ないが、生きてゐる私自身は自分を要求であるに直感することが出来る。

けれども要求がありましても、それだけではマダ生命にはなりません。要求があると同時に、其要求を果す力がなければならぬのであります。若し人間に要求を云ふものだけ與へられて、それを果す力がなかつたならば、要求を持つてゐる人間は極めてみじめなものであります。けれども天の神様は人間といふものをそんなものに造つて呉れなかつた。人間に要

求を與へたと同時に、それを實現し得る力をもちやんと與へて呉れたのである。要求だけ與へておいて、力を與へなかつたならば、それは矛盾であります。生活の根底は矛盾であります。けれども實はさうぢやない。我等は要求すると同時に、其の要求を實現する力を持つて居るのであります。

人間のする仕事として價值あるものは、皆人間の要求に満足を與へんことをするものである。宗教とは何であるか。生きんことを要求を完全に果さんとする企てに過ぎない。昔から宗教は世の中を捨てる事になつて居りますが、それは小乗宗教であつて、大乘宗教になつて來たらさうでない。人間の根底は要求であるから、其根底たる要求に完全なる満足を與へんことをものが即ち宗教でなければならぬ。其の外文明と言はうと、文化と言はうと、藝術に云はうと、結局する所、人間の要求を如何にして完全に果すべ

きかこ云ふここの問題を解決せんとする所の方法に過ぎない。文化生活よりも藝術の方がより多く人間の要求を充す。藝術生活よりも宗教生活の方が人間の要求により多き満足を與へる。かう云ふやうな具合に、程度の差別はありませうが、結局人間のする仕事の一切は、人間の要求を如何にして満足せしむべきかこ云ふここのなる。さうして其の要求を満足させる力が、人間に備つて居るのである。斯くの如く一方に於て要求があり、他方に於て其の要求を果す力が備つて、茲に生物こ云ふものが出て來るのであります。観念こいふのは、まさにそれでありませう。

二、観念の要求と力

観念は一方に於て要求であり、同時にそれを果す力であります。私は十

數年程以前に「観念は力なり」こ云ふここの主張したのでありますが、斯ういふここの主張してすらも、多くの心理學者からは大膽なここのを云ふここの言つて嗤はれたのであります。然るに今は「観念は力」こ云ふだけでは、私の思ふ所を十分に言ひ盡さぬのであります。無論観念は力であるけれども、それが所謂物理學上の力の如く、盲目的の力であるならば、生命こ云ふここのが出来ない。唯物論者は物質を集めれば生命が出来るこ云ふが、盲目的な物質の力を、ごんなに集めても、それから生命のテレオロジーが出て來ない。單なる血液の循環こか、呼吸運動こか云ふものは生命でない。生命にはテレオロジーがある筈です。呼吸こ云ふのは空中を風が吹いて居るのこは違ふ。血液が流れて居るこ云ふここのは、溝に水が流れて居るのこは違ふ。生命の現象にはテレオロジーがある。テレオロジーの根底は要求である。

そして其要求を果す力があるから目的活動——生命云ふものが出て来るのである。観念が單なる盲目的の力であつたならば、生命の根底なることが出来ない。観念そのものが要求で、そして力である。私はかう云ふ具合に主張するのであります。観念は力であると言つてさへも氣狂ひの如くに思はれて居つた私は、今や「観念は生物なり」を主張して、益々氣狂ひの極致に入りかけました。愈々これで完全なる巢鴨病院の厄介者になるのです。けれども私は、此の主張が勝を得るに信じて疑はないのであります。

そこで私は實例を擧げて、観念は要求である、力である云ふことを證明せなければならぬのであります。第二章の人格の構造の所まで行けば、観念のテレオロジーがハツキリして参ります。最初はハツキリしませぬが、或程度まで實例を擧げてお話し致します。

観念はさう云ふ要求を持つてゐるか云ふに、それは肉に即して自己の姿を實現するここでありませぬ。精神中に一つの観念を描いたならば、其の観念は必ず此の肉の上に自己實現しやうと要求して居ります。どんな微細な観念でも、一たび吾人の精神中に現はれたならば、それは必ず肉の上に自己實現し、肉を舞臺として其所に自己の姿を現はさうと求めて止まない。それが観念の要求であります。だから観念は藝術家です。藝術家云ふものは一度び一つの理想を持つたならば、それを單なる観念として、其の儘に置くに忍びないのであります。一度び観音菩薩の姿を思想中に描いたならば、必ずその観音菩薩を紙の上か、大理石の上か、木の上かに現はして、繪畫か彫刻にせすに措けないのであります。どんな観念でも藝術家の頭に動いてゐる観念は、小説か、建築か、繪畫か、彫刻になつて、必ず自

己の姿をそこに現はす。それが藝術家の眞面目であります。ゲーテの作つた小説の中に、斯う云ふことがあつたやうであります。タツソー云ふ詩人が居りました。其詩人は即ち詩人なるが故に、自分の思つて居ることを無遠慮に詩に現はすのです。所がその詩のために、非常に禍ひを受けるのです。そこで友人が忠告をする。お前は非常に無遠慮に詩を作るから、一生お前は轆轤不遇の境遇に呻吟しなければならぬのだ。少しは自分の言ひたいことをゆるめて、詩を少し穏和に書いたらさうか、云つて忠告致しました。其時タツソーが答へました。蠶を見よ、あの蠶さういふものは口から綺麗な絹糸を吐いて、さうして繭を拵へるが、其の蠶に向つて、お前は口から糸を吐くのは詰らぬから止めよ、云つた所で、決して止めるものではない。口から糸を吐くことそれ自らが蠶の生命である。死を以て脅して

も、決して蠶は口から糸を出す事を止めるもではない。詩人が詩を作るのは、蠶が糸を吐くのと同じである。さうやうな武力を以て脅しても、富の力を以て誘惑しても、蠶が糸を吐くのを止めることが出来ないと同じ具合に、俺は自分の心に閃く眞理を詩に造らないで居られない。詩を作ることをそれ自らが、私の生命であると言つた云ふことでもあります。藝術家云ふものは天才になればなる程、タツソーの様になるのであります。總て天才家云ふものはさうであります。宗教家もさうである。眞理を語るものは磔にせらるゝで、さうやうに自分の身體が磔刑に處されるやうになつても、自分自身の信じてゐる所は、さうしてもこれを言はずに置けないのである。そこに私は眞理云ふものゝ偉大さがあると思ひます。世間に氣象をして黙つて居ることの出来るやうなものは、本當の眞理ではないのであります。

す。世間がごのやうに自分を脅しても、敢然として自分の信ずる所を云ふので、始めて宇宙の大靈に接した真理の體得者云へると思ひます。真理は活物で、一たび人の精神中に宿つたが最後、赤兒が母の胎内から生れ出づるやうに、何等かの姿となりて、自己を實現せずには置けぬのである。観念もまさにその通りであります。観念が精神中に一たび活動したならば、何處か肉の上に自己を現はさなければ歇まないと云ふ要求を有ち、又これを果す力を有つて居ります。だから観念は要求であり、又力である。即ち観念は生物であります。

この事は色々の例で證明出来るが、先づ最も分り易いのは観念運動であります。

三、観念運動—模倣運動

亞米利加のジエームス教授は、此の問題をやかましく言つたのであります。古い心理學者は、観念そのものには肉の上に働きかける力はないものと云つたのであります。観念は意志の力を通じて、間接に肉に働くことは出来るが、観念そのものが直接に肉の上に働くことは出来ないと言つて居つたのであります。かう云ふ具合に、人間の運動を凡て意志の活動から説明したので、観念は筋肉に對しては無能無力のものであるとされたのであります。所が獨逸のランゲ氏、亞米利加のジエームス教授の如きはさうではない。観念そのものが直に肉の上に働き得るものであると主張致しました。吾々の日常の活動を調べて見るに、観念そのものが直ちに肉の上に

働き得るものであると云ひ出したのであります。例へば茲に菓子鉢に熬豆でもあると致します。私共があれを唯ヂツと見てゐると云ふことはむつかしいもので、何時の間にかやらそれを摘んで食べるものである。それは食べるべく意志して食べるのではない。一寸見ると思はず知らずに食べる。今御飯を食べたばかりだから、食べぬ方がよからうと思つても、ツイ食べるのです。ヂツと見てゐると、なんだか掌が痒いやうな氣がするから、マア、マア是れ一つだけ食べて止めようと思つて食べる。食べ終りて暫くするに、又掌が何だか痒いやうになつて又一寸摘む。是れは人格上の決心によつて起つた働きではなくして、只豆であると云ふ観念を精神中に描いただけで、直ぐ様起る運動である。それで之を観念運動と名付けて居るのであります。斯う云ふ運動は豆の時ばかりではない。吾人の日常生活には

澤山あります。例へば扇なきでも、夏暑いときに開いて煽ぐのは、暑いから煽ぐのでありますから、テレオロジがハツキリ分つて居ります。けれども、如何に寒い時でも、扇を持つて居れば、知らずに開いてかうやつて煽いでゐるものである。あれは扇と云ふ観念が直ちにかゝる運動を惹起したので、即ち観念運動であります。それから人の挨拶なき見て居つてもさうです。其の人々により挨拶の仕方が違つて居るものです。自分自身は決まつて居ると思はないが、側から見てゐると、人の挨拶と云ふものは其人其人によつて、一定の形式を持つて居ります。誰れでも途中で友人を見るにコツと笑ふものです。あの時は笑ふ決心をして笑ふのではない。友人ぢやと思ふと、直ぐに顔面の筋肉が動き出して笑ふので、即ち観念運動である。それから帽子をさるが、其の取り方でも、中折帽子をなら三本の指でかうこ

る。さうかと思ふに帽子の縁の方を持つて取る人もある。さうかと思ふに後ろから前にがばつと取る人もある。それから帽子をもつて居る姿も、かうやつて居るものもある。さうかと思ふに曲けてしまつて、丸で雑巾でも絞るやうに、斯うやつて話をしてゐる人がある。あれは別に自分自身があゝ云ふことをやらうと云ふ意志があつてするのでない、帽子であること云ふことを観念すれば、あゝ云ふ運動を現はして来る。即ち観念運動であります。

観念運動は、甲の人から乙の人へ非常に傳染し易いもので、所謂模倣運動と云ふのが現はれて來ます。例へば茲に時計を見る人がある。一番初めの人は、見ようとのテレオロジーで見るのである。人格上の意志の要求で、何時であるかと思つて見る。さうするに其隣りの人が、斯うやつて懐中時計

計を見る。更にその隣りの人も時計を見る。「何時ですか」といふに「マダ時間は見なかつた」と云ふ塩梅に答へます。あれは時間を見るためにやるのではない。隣りの人が見たから自分も見るのである。即ち観念運動である。芝居なき夢中になつて見てゐる人を御覽なさい。役者のする通りに自分の顔なき動かして居るものであります。自分が眞似しようと思つてやつて居るのではない。舞臺上の役者が一定の所作を演ずるに、見物人が知らず其の通りに運動するのである。是れも観念運動です。それから吃りなき、云ふものは、能く傳染するものである。私が十數年前、大阪に行きまして、或る宿屋に泊つて居りました。所がその宿屋の主人が非常に心理學の熱心家で、私が一週間滞在してゐる間に、自分の商賣はそつちのけにして、私の室へ來て、何だ彼だ、と心理學上の話をしてゐる。所が此の主人公、妙な

癖がありましたして、話をする最中に咽が詰つたやうな様子をして、一寸話をこぎるのであります。私は變な癖だと思つて見て居りました。一週間其家に泊つて居りましたが、それから東京に歸つて、大學で講義をして居るに、其の最中に私の咽が詰つて一寸話を切るのです。それは一ヶ月程で消失しましたが、實に厭なことであります。支那には昔西施といふ美人があつたに云ふ話があります。此の美人は胸に病があつたので、始終眉をよせて、八の字にしてゐた。さうするに其の村の婦人が、皆眉を八の字にして居たに云ふことであります。女學校なごでも非常に目に付く女があるに、他の女生徒はそれを知らず識らず眞似するものであります。私が女子大學に居るに、或るクラスに非常な美人で、而かもよく出来る生徒が居りました。彼女は先生に呼ばれて、其前で話をするに、右手の掌で、鼻ミ口ミを

押へる癖がありました。所がこの癖がクラスに傳染して、同級の生徒達が先生の前で話をするに、皆鼻ミ口ミを押へるやうになりました。慥う云ふ具合に、目星のつく人がやりますに、善惡に拘らず、それと同じことをやつて居る。又、私の子供の時に、私の町に二軒長屋に住んで居るお内儀さん二人連れが、日蓮宗の法華寺に云ふお寺へ參詣したのであります。所が丁度其の時、お坊さんが狐憑患者の爲めに狐を落す御祈禱をしてゐる時であつた。木劍に珠數を當て、カチ／＼音をさせながら御經を讀んで居る。患者は妙な聲を揚げて叫んだり、四つ匍ひをしたり、飛び上つたり、いろ／＼なことをやつて居る。參詣した二人の婦人は此の奇現象に魂を奪はれて、一生懸命に見て居つたのであります。そして御祈禱が濟んで婦人が家に歸るまでは宜かつたのでありますが、其晩の十時か十一時頃になつて、世間

の人が寢靜まるに、此の長屋の二人の婦人が、妙な聲を出して騒ぎ出したのであります。近所の人達は何事ならんに、戸の隙間から覗いて見るに、座敷を四ツ匍ひになつたり、變な聲を出したり、飛び上つたりして居るのであります。丁度其の日、寺で見て來た狐憑者其儘の舉動をしたのである。それは一時の事で、翌朝治つたのでありますが、是は所謂模倣作用で、晝の間一生懸命見て居つた狐憑現象の観念の自己實現の爲めで、晝の間は他の観念の爲めに妨げられて、自己實現が出来なかつたが、もう世間の人が寢靜まつて、外界の刺激が段々なくなり、心が靜まつて來るに、今迄自己實現をなすべく時期を窺つて居つた狐憑現象の観念が活動を初めて、丁度晝間見た狐憑者と同じことをやるのは當り前のことであります。さう云ふ現象の現はれて來ないに云ふのは、それに對抗する反對観念の妨害のためで、それが無く

なりさへすれば、一度び狐憑を見て感ずれば、それと同じ行動を現はすに云ふのは観念そのもの、性質上自然の結果で、少しも不思議ではないのであります。寧ろさう云ふ行動の現はれないのが、不思議に云つてよい位であります。

以上の如く觀察するに、観念運動は日常生活に非常に多いのであります。我々は衣服を着る時、顔を洗ふとき、御飯を食べる時、仕事をする時、人ご挨拶をする時、十中八九までは観念運動によつて行はれて居る。但し時々は、最初の一步だけは意志の命令で喚び出されるけれども、それから後は、吾人の身體は自動器械の如く、獨りで動いて行くのである。さう云ふ具合に日常生活の大部分は観念運動でありますから、観念そのものが筋肉の上

吾人は仕事をする場合に、観念運動の心理を利用して能率を擧げるべきであるのに、世人は間違つた考へから其の利用を失ふことがある。勿論観念運動を制止せねばならぬ場合もありますけれども、大體上観念運動は日常生活にも必要でありますから其の心理を利用するのが、日常生活の能率を増進する上に必要なことでもあります。昔四ツ車大八（イッポウハチロー）云ふ相撲取が仙臺の方に興行に行く途中御承知の通り今日のやうな汽車のない昔のころですから、馬の背に乗つて長い道中を行つたのであります。其の四ツ車大八の馬を曳いて居つた馬子が途中で四ツ車大八に話かけた、お前さんは何云ふ關取か。』俺は四ツ車大八云ふのだ。』それではお前さんは江戸では關取だな、俺はこれでも村での相撲取で誰にも負けたことはない。一つ俺も相撲を取つて呉れないか。お前の様な日本の大力士に逢つたころが

ないから、俺も一つ相撲をこつて呉れないか。』言つて頼んだ。さうするに四ツ車大八も馬鹿々々しいは思つたが「一つ慰みにやつて見ようか。』思つて、路傍の草原を土俵にして相撲をこつたのです。所が何遍もやつても四ツ車が負けたのであります。さうする内に後から木村庄之助が追付きました。見るに、四ツ車も馬子も相撲をこつて居る。「關取何をして居るんだ。』俺は此の馬子も何遍相撲取つても負けるが、さうも不思議だ、貴方氣の毒だが茲でいつもの通り袴をつけてハツケヨイヤ〜をやつて呉れ。さうやつて貰はぬにさうも具合が悪い。』それから何時もの通り木村庄之助が本式に袴をつけて構へた。四ツ車は本當に四股を踏んで、馬子も相撲を取つたのである。所がそれから後云ふものは、何遍相撲を取つても馬子が負けてばかり居る。是は平素から木村庄之助にハツケヨイヤ〜を

云はれて、其の聲を聞いて相撲を取つた四ツ車ですから、其の行司の聲が四ツ車の筋肉の運動に必要な観念刺激となつて居ります。其の聲を聞かずには、さうしても力が出ない。行司の聲は四ツ車の力を出すに重大な關係があつたのであります。それと同じ例が澤山にあります。是は女子大學で私の教へた生徒の實驗談であります。彼女は英語がよく出来るので、何時も試験には優等でありました。所が或時の試験には、何だか氣が落着かないで、答案が思ふ様に書かれないのであります。其の結果、試験は甚だ不成績でありました。それで其の女生徒は何故に斯んなのであるかを考へて見ますと、其の理由が分りました。それはピアノの音が聞えなかつたこと云ふことでもあります。彼女の英語の時間には、いつも隣りの教室では音楽をやつて居るのでした。彼女は隣りの室から来るピアノの音と英語の知

識とを同時に経験したので、聯合關係が成立して、ピアノの音が英語の知識を呼び出すのに、必要な刺激観念となつてゐたのであります。所が試験の當日には、生憎、音楽の先生が休んで、ピアノの音を聞くことが出来なかつたのであります。英語の知識を喚起するに必要な観念刺激がなかつたのであります。それで成績が悪かつたのだと分つたのです。それから又農學博士某氏が、かう云ふことを言つたことがあります。さうも田植のときに、歌を唄ひながらするのは不經濟である。歌を唄へばそれだけ身體のエネルギーが減るのだから、黙つて植ゑたならば、歌の能力が手の方へ行つて、能率が上るだらうと云つたが、これは仕事の心理を知らざるものゝ説であります。歌にはリズムがありますから、それが田植をする時の手の運動と調子が合つて、仕事の能率を上げるのである。丁度ダンスと同じである。

ダンスをやるには音楽が必要であると同じで、田植をするには田植歌のリズムが必要である。歌を唄ふことは必要であります。軍隊でも道を歩いて疲れた時、軍歌を謳ひながら歩くに疲れを忘れて歩くのであります。一定の境遇に於て働いた習慣の人には、其の境遇の観念が運動に必要なのであります。精神に具つてゐる力であるなら、境遇如何に拘らず、其の力を使ふこゝが出来さうなものだが、言ふ人があるが、決してさうではありません。境遇が變つて來れば、心身の働きが澁つて來るのであります。歌を唄ひながら働いた人は、其の歌を唄はずには出來ないのであります。さう云ふ譯で、我々は或る一定の境遇に於て、一定の観念を心に念じながら活動したときには、その観念を何時でもそこへ提供してやらなければならぬ。さう云ふ観念を提供しないでも、自分の力だから何時でも使用出来るさ考へるのは間違ひであります。

四、観念による生理的變動—精神治療

其の次は観念による生理的變動であります。我々の筋肉が観念の力によつて動き出すばかりでなく、我々の生理的活動そのものが観念の力によつて變つて行くのです。例へば人に催眠術をかけて置きまして、鉛筆のやうなものを其人の手に當て、焼火箸だと言つて暗示するに、鉛筆を當てた所が丁度焼火箸を當てたと同じ様に火傷致します。これは焼火箸を當てられたに云ふ観念が働いて、皮膚に火傷を惹起したのであります。斯ることは催眠術の研究に於て能くある事實であります。さう云ふ塩梅に、自分の體に一定の生理的變動があるものだに念するに、観念の力によりて生理

的變動が自然現はれて來ます。想像妊娠云ふのがあります。子を孕んだものと思ひ詰るゝ實際は子を孕んで居らなくとも、身體の塩梅が總て子を孕んだと同じやうなこゝに變化して來る。是は産科醫者の能く知つてゐるこゝである。悪阻が起るゝか、乳暈が着色して黒くなるゝか、腹部が膨張して胎動を感じるゝか、種々の生理的變動が現はれて來ます。是は實際私の友人の奥さんにあつたこゝですが、子供を欲しい欲しいと思つて居つたけれども、さうしても子供が出来ない。所がさう云ふ加減か月經が止まつた。そこで婦人は屹度妊娠したに違ひないと思つてゐるゝ、何だか酸バイ物が食べたくなつたり、眩暈を感じたり、乳暈が黒くなつたりした。けれども十ヶ月経つても一向に子供が生れない。さうも可笑しい云ふので、産科醫に見て貰つたさうです。醫師は診察してから、貴方は妊娠したので

やありませぬ。貴方は妊娠して居ると思つただけで妊娠ではありませぬ。詰り妊娠してゐるゝ想像したために、斯う云ふ現象を惹起したのです。さう云ふ事は世間によくあるこゝです。別々に心配なさるゝに及びませぬ。數日経つたら治ります」言はれたさうですが、一週間も経つゝ大きな腹がペチャンと小さくなつたのであります。かう云ふ實例は随分多くあるこゝであります。さう云ふやうな塩梅で、我々の身體の構造が自分の觀念の念じた通りに、いろゝの變動を現はすのであります。大谷派の眞宗大學が東京にあつた時に、私が其處で數年間教鞭を執つて居りました。其の時、卒業生の一人が私に斯んなこゝを話しました。能登の七尾云ふ所に一遍死んで再び甦つた人があります。本當に死んだものなら甦らないが、一切の生理的活動が停頓して、死んだ様に見えたものが、元に歸るのが蘇生で

あります。一體醫者の方なごで血液の循環が止り呼吸が止まれば死んだものご断定しますけれども、死に云ふごこは單に血液循環が止つたごか、呼吸が止まつたご云ふごこではないのである。血液の循環が止り呼吸運動が止まつても死なゝい事があります。それは一時生命の休息に云ひませうか、生命の活動が休んだ丈で、死ではないのです。催眠状態に云ふのは精神活動の一時的停止であります。然しそれに伴ふて生理的活動も或る程度まで止まつて居ります。かう言ふ事が徹底的に進んで行けば、生理的活動が悉く止まつて了ふのであります。けれど、それが死でないから、相當の方法によりて、元の通りに引き戻すごこが出來ます。印度の婆羅門の行者等は、一定の行法によりて數十日或は數ヶ月間、斯る状態に居り、そして又一定の法によりて再び元の状態に歸り得るのであります。然しそれは必

ずしも一定の行法ばかりによつて出來るものに限りません。生命は何等かの偶然的出來事によりて、自ら斯る状態に入り、そして又自ら元の状態に歸復するごこがあります。それは生命の停頓であつて死ではないのです。それをお醫者の方では血液の循環が止まり、呼吸が無いから言つて、死亡の診斷をするのであります。随分危険な事であります。本當の死であるならば、愈々死ぬに云ふ一週間前頃から屍臭が致します。嗅覺の鋭敏な看護婦なごは、斯る屍臭によりて、一週間も前から死の近づきつゝあるごこを前知し得るのであります。所が入定者は死んだのではないから肉が腐敗しない、従つて屍臭がない。斯様であるから蘇生ごは死んだものが生き返へるのではなく、生命の停頓者が元の状態に歸るだけであります。従つて其の死んだ如く見ゆる状態に於て、いろ／＼な精神活動の現はれるごこが

あります。今お話しました七尾の或る老人も生命の停顿によりて、死んだやうな状態になりました。醫者は死んだものゝ診斷したので、棺桶に入れ、檀那寺のお坊さんと呼んで、親類や友人が寄つて、夜伽の御經を上げて居る。さうするに棺桶がミシ／＼ミ音を發する。來會者が「何だらう」ミ怪しみ居る中に、棺桶の蓋が一丈程透いた。見る内にバンミ蓋を取り除けて、經帷衣を着たお爺さんがニューツミ立つた。サアお伽に來た連中は「ソラ、幽霊だ」ミ云つて、室から逃げ出すのであつた。所がお坊さんだけは流石に逃げずに居た。「これは黄泉歸りミ云つて、能くあるこぢや、幽霊ではないから、皆さん騒がずにお這入りなさい。」ミ云つて皆を静めました。皆の人々は「成程、足があるから幽霊ではないだらう。」ミ云つて再び寄り集つた。それから黄泉歸りのお爺さんは衣服を着替へ「今地獄に行つて來たから地獄廻りの話

をする」ミ云ふので、それから景氣が變つて、皆の人達が話を聞くこぢになりました。お爺さんは次の如く語り出しました。冥土の道を段々ミ行きますに、大きな鐵の門があつて、右ミ左には赤鬼、青鬼が立つて居つて「貴様は何者だ」ミ云ふから、私は「何の某で御座る」ミ答へました。「何處から來た。」娑婆から來ました。「お前なまは斯んな所に來るのは早いから歸れ。」折角來たものだから、さうか通して下さい。「解らぬ事を申す。お前はマダ來るには早いから歸れ。」ミ言つて、赤鬼が疣々のついた十八貫目の鐵の棒を以て、尻を打た、か打ちました。その痛さで目を覺まして見れば、棺桶の中でありました。茲を打たれたミ言つて、尻を出したのを見ますに、成程、血が滲み出して居る。これは何も實際、赤鬼に尻を打たれたのではない。地獄に行つたミ云ふ精神の活動により、地獄を現はし、金棒に打たれたミ云ふ觀念によつ

て、血が滲み出したのであります。觀念の力によりて生理的變動が起り、血が滲み出したのであります。

殊に貴方がたにお話したいのは、子供の顔付が里親に似るこ云ふことであります。赤ン坊の時から里親に附けて置くこ、其の顔が里親に似て來ます。物質學者なごは、里親の乳を飲ませるから、其影響を受けて里親に似るこ云ふのであります。けれども私共は其の説は取りませぬ。乳を與へるが爲めに、其の顔が里親に似るこ云ふのならば、ミルクを飲んだ子は皆牛に似る譯けですが、そんなこごがありません。今日は文明の世の中で、牛の乳で育つ子が澤山にあるけれども、何處にも牛の顔に似たものはありません。乳は此の事に關係ありませぬ。然らば、何故に子供の顔が里親に似るかこ言ふに、それは觀念の働きによる結果であります。里子は里親の懷ろに抱

かれて、乳を飲みながら、日々親しくその顔を見詰めて居る。さうするこ里親の顔の觀念が、子供の精神中に植ゑつけられる。別に里親の顔に似ようこ決心をするのではありませぬが、一心に見詰めて居れば、里親の顔の觀念が、自己實現の要求によりて、子供の顔面の細胞に働き掛け、里親の顔に似るよう變化させるのであります。尤も親からの遺傳もあつて、其の力が働くから必ずしも里親の顔に完全に似るこは言へませぬ。又、私共のやうに成長し切つて、顔の形が定まつて了へば、今更里親の顔を見ても似るこごはありませぬ。けれども、赤ン坊の様に、マダ充分筋肉の定らない成長力の盛んな時に、里親の顔を見て居るこ、段々顔が里親に似て來るのであります。支那人の説く胎教こ云ふ事も、重大視すべきであります。母親の心に浮ぶ觀念は、胎内の子供に必ず働きかけるに違ひない。母親が一生懸命、例へ

ば、日本で言へば觀音様、西洋ではマリヤ様云ふ立派な慈悲深い方の像を一心不亂に念じて居れば、其觀念は必ず胎内の子供にも影響する云ふことは、信じて疑へないことであります。子供を孕みながら鼠小僧や石川五右衛門の小説を読み耽つて居ては、碌な子供は出來ないに決まつてゐる。

結局、觀念には自己實現の要求ミカミがあるから、吾人が一定の觀念を強く念じて居れば、吾人の身體の構造も姿も、其の觀念の要求する通りになるのであります。従つて甲人が乙人に親しく接して、其の言語や行動を一心に見聞して居るミ、別段それを眞似る意志は無くても、其心も身體も悉く乙人ミ一致するやうになる。是が生命の原則なので、所謂感應であります。詰り甲人の言動によりて與へられた觀念が、乙人の身體に自己實現することの結果であります。西郷南洲先生のやうな人物に接して側に居れば、吾

人の心が段々ミ廣くなる。ヒステリーのやうな落付きの悪い人の側に居れば、吾人の性質が險はしくなつて來る。性急な心を持つて居る親の子供は、段々性急になつて來ます。親が濃厚篤實な廣々ミした心を持つて居るミ、子供がそれを別に眞似する心がなくとも、自づミ一致して行くのです。良い事でも、悪い事でも、その人に接すれば眞似しようミする心がなくとも、自然ミ眞似して行くのであります。之を私は感應ミ名付けて置きます。詰り各人の生命ミいふものは、一つ一つ孤立してゐるのではない。感應の關係によつて、相互に感化したり、感化されたりします。従つて人間の生命は之を取り巻く人々の魂によつて生長します。吾人に對して魂がなかつたならば、其の生命ミ云ふものは生長發達を遂げることは出來ない。私は諸君の魂に對して生きて居る。諸君の魂から孤立して、私の魂が伸びるの

ではない。諸君の魂と私の魂との間に感應がある。諸君の一舉一動を見るここが、直ちに私自身の精神、身體の上にそれと一致して行くこと云ふ活動を起させる筈であります。私が一切の雑念を拂ひ、精神統一、無我一念の境涯に於て、諸君の行動を見詰て居れば、私の行動それ自身が諸君の行動と一致して行くのであります。それ程までに精神統一が出来ないから、諸君と私との間には隔たりが出来ますけれども、眞に精神統一、無我一念になつたならば、私の魂が諸君の魂と一致して行くのであります。

坊間に行はる精神治療なるものも、亦観念の自己實現の結果である。吾人が病氣であつても、それが治ること云ふことを念するならば、其観念通りに病氣が治ります。病氣がないのに、ある／＼と思ふに、吾人は病氣になる。それで、人に向つて其の精神中に「病氣は治る」と云ふ観念を懐かしむること

が、精神治療の根本原理であります。人に向つて、「お前の病氣は治ります」と言つて、其の人をして此の言葉を受取るやうにさせることが出来れば、病氣が治ります。但し、此の言葉を患者の精神中に充分に強く與へることが出来るかどうか。其處が精神治療の上手下手の別れる所であります。「お前の病氣は治ります」と云ふ暗示を患者が無我にして受取れば治りますが、さうでなければ駄目であります。催眠術とか、氣合とか言ふものは、結局患者をして此の暗示を充分能く受取らしめる方法にすぎぬのであります。

要するに観念と云ふものは、どんなものでも精神中に一度び現はれたならば、それは自分自身を肉の上に現はして行かう／＼と云ふ要求と力とを持つて居るのであります。さうして其の観念の力によつて、人々との間に、感應の關係を結ばせるのであります。故に観念は活物であります。肉

の上に於て自己實現せんとする要求を、それを現はす所の力を持つて居る活物であります。

第二章 人格の構造

一、観念の生存競争

第一章で「観念は生物なり」と云ふお話を大體したのであります。まだ其説明は十分ではなかつたかも知れませぬけれど、略ぼ要求を實現する力を有つて居ることを云ふ點から、観念は單に空に浮いてゐる無能無力なものではなくして、肉の上に自己實現しようとする生物であることを云ふことのお話をいたしました。所で観念といふものは無數であります。それだけあるのか數へることは出来ませぬが、實に観念の數といふものは無數であります。それは私共が子供の時代から經驗したことをばかりではないので、

無限の過去の祖先から遺傳されたものもあります。尤もこの點についても十分に御理解を得る迄には、お話を長くせなければなりません。今日そこ迄のお話を續ける譯には行きませぬ。過去の祖先から遺傳された觀念は觀の字をつけずして單に念と云つたら宜しいと思ひますが、我々は意識的には感じては居らないけれど我々の身體に即して活動して居る所のものが、無數に遺傳されてゐる。佛教ではさういふものをば業なきと名づけて居りますが、私共は念と名づけて居ります。觀念と言つた時には意識の上に姿を現はして居るのである。意識の上に姿を現はさずして、直ちに肉の上に自己實現して居るのが念であります。私共の身體は單なる物質の活動によつて、斯くの如き姿をなすのではなくして、無限の過去から遺傳された所の業力、即ち念の働きによつて、斯くの如く美はしき五體を備へて

生れて來たのであります。かくの如く業として傳へられた無數の念がある。それは意識的には現はれて居らないけれど、身體の上に直接に活動して居ります。

我々は無數の觀念を有つて居ると言ひましたが、其の無數といふ言葉は、諸君の想像されてゐるよりも、一層力強いのであります。此の點をも理解しておかなければなりません。それは記憶を研究して見てもよく解ります。通常記憶といふものは、想ひ出し得るものだけの過去経験を言ふのであります。想ひ出すことの出来ないものは、最早精神中から消滅して了つたものゝやうに、世人は一般に想像して居りますが、實は決してさうではない。私は「過去は不滅なり」と主張するのであります。我々は赤ン坊時代から、今日に至るまで経験したことは、どんな小さい経験でも、悉く不滅なもの

こなつて、我々の精神中に現存して居るのであります。我々の経験の中に有るものは、一厘一毛も雖も、決して消滅して居らないのであります。即ち「過去は不滅」であります。物理學的の過去はなくなつたのでありませう。けれども、吾人の経験した歴史は一毫も雖も、減ずることなく、現在の精神の中に、包藏されてあります。是はベルクソンの「物質と記憶」と言ふ書物にも面白く論じて居りますが、私は此の理論を擴大して、宇宙全體に就いて「過去は不滅なり」と主張するのであります。換言すれば宇宙には記憶があつて、宇宙全體の無限の過去は、現在の中に包藏されて居ると云ふことを主張するのであります。それを小さい所で論ずれば、一個人の吾々にも過去が宿つて居る。赤ン坊の時代の小さな小さい経験でも、少しも消えることなく、現在に保存されてゐるのであります。カーペンター氏の著書 *Mental phy-*

siology の内に、斯んな御話があります。或るイギリスの基督教の牧師が、何かの用事のために友人と一緒に、サセツクスに云ふ町へ行つたところがあります。此の町の入口に城門がある。そこを通らうとするとき、何の氣なしに其城門を見るに、自分が何時か知らぬけれども、此の城門を嘗て通つたところがあるといふ感じを懐いたのであります。當人は始めて、其の城門を通るのであると思つて居るのに、直感的に此の城門は何時か知らぬが、遠き遠き過去に於て通つたといふことを直感したのであります。只そればかりではない。其の城門の上には、五六人の人が辨當を食べて居つたのである。其の下に驢馬が居つたこと云ふことを、何かしら直感したのであります。けれども彼が彼の過去を翻つて見ても、決して過去にさう云ふことがあつた筈はないので、不思議なことに、思ひながら、家に歸つてから、其の事を母親に

告げたのであります。しまするに母親が説明した。それはお前が彼所を通つたところがあるのぢや、お前が生れてから十八ヶ月目に、私はお前を連れてあの城門を通つたところがある。其時同行者数名が城門を通る時は、丁度食事時刻であつたから、一同は城門の上に登つて、辨當を食べて居つた。そしてお前は驢馬の背中に乗せられて、辨當を食べ終るまで待つて居つたのである。それはお前が生れてから十八ヶ月目の事であつたが、それをお前は想起したのであらうと云はれた。して見ますれば、普通人は生れて十八ヶ月目位の経験は、全然記憶中に其の痕跡を留めるものではない。消滅するものであると思つてゐるけれど、論より證據、普通の場合には現はれて來ないが、何かの機會に電光石火的に現はれるところがあります。それが記憶といふものは、如何に偉大なものであるかと云ふ一つの例證になつて居り

ます。又是は私の友人で、熊本の濟々堂の校長井芹經平氏の話されたところでありますが、或小學校の生徒がチブスに罹つて死んで了つた。死ぬ一週間程前から、其の子供が大變に譫語を云つて居つたのです。其の子供は小學校の生徒にして、別段記憶の良い子供ではなかつたけれども、熱病に罹つて死ぬ一週間程前から、不思議にも一年間、學校で習つた小學讀本を、始めから終りまで一字一句間違なく暗誦の譫語を言つたのであります。さう云ふやうなところは到底不可能なところだ、多くの人は思つてゐるけれども、井芹氏が目前見た實例にして私に傳へたのであります。して見れば、人間が一たび経験したところは、悉く精神中に存在して居るのであります。變態心理學の上から研究して行くに、さう云ふ實例は澤山にあります。更に此の記憶問題には、念寫問題と結びつけてお話ししたいところがあります。

大町桂月氏の書いた「人の運」云ふ書物があります。此の書物の序文は、大町桂月氏自らが筆を執つて書いた肉筆を寫眞に撮つたものであります。或時、私は此の書物を、私の所に居つた千里眼能力者に念寫させたのです。即ち此書物の扉に書いてある、「人の運」云ふ文字を念寫させたのであります。能力者が此の文字を凝視して後に念寫した所、全く實物と違はぬやうに、文字が寫眞乾板の上に現はれたのであります。そればかりならば普通の念寫であります。乾板をよく吟味して見ますと、大町桂月氏肉筆の序文も薄く寫つて居りました。書物と乾板とを精密に比較して見ますと、其の文章が一字一句間違ひがないのみか、其の文字までが實物通りであります。そこで私は其の事に就いて、能力者に尋ねました。「人の運」云ふ文字は始めから念寫する積りであつたが、其の外に序文が寫されて居る。

それは一體、初めから寫す積りでやつたのか、恚う聞きますと、彼は驚き乍ら、いやさうぢやない。全く念寫する積りではなかつた。けれども此の序文は私がすつこ前に二三回讀んだこゝがある。大へん良い文章だと思つて讀んだ。今それを想ひ出せよ云はれても、想ひ出すこゝは出來ないが、孰れそのこゝの記憶が寫つたのであらうと答へたのであります。して見るに普通の精神状態で想ひ出さうとしても想ひ出すこゝの出來ない經驗が、念寫には現はれたのであります。即ち想ひ出すこゝの出來ない經驗が、神の奥底には完全に保存されてゐるこゝが、これで明かに解ります。普通想ひ出すこゝの出來ぬ微細な經驗が、念寫に現はれるこゝは能くあるのであります。そして又、たつた二三回しか讀まなかつた序文が、一分一厘の相違もなく、全く實物の通りに念寫に現はれたのは、實に興味多き事實で、是は

人格的に記憶を喚び起さうとしても出来ない所の経験が、精神の底に隠れて、それが自己實現の要求によつて現はれたのであります。我々が人格の要求によつて、過去の記憶を想ひ出すことは非常に貧弱であります。けれども記憶そのものは完全に保管されて居るのであります。かう云ふことはベルグソンの「物質と記憶」に云ふ書物に面白く書いてありますが、私は變態心理研究の上から、凡ゆる過去の経験は不滅であること主張するのであります。

かくの如く過去の経験は、どんな小さいものであつても、悉く記憶になつて我々の精神中に疊み込まれてゐるのであります。そして其の上に無限の過去から今日に至るまで遺傳された業が、念になつて精神中に存在するのでありますから、我々の精神中にどれだけ多數の觀念があるのか、それは

迎も想像するこゝも出来ない程に多くある譯であります。所がこの觀念も、この觀念も、悉く肉の上に自己を實現しよう、實現しようを要求して居るのであります。どんな觀念でも肉の上に要求を實現しようをしないものはないのであります。觀念は無數であるが、此の肉には限りがあります。其の結果、觀念と觀念との間には、肉を所有しようとする生存競争が始まるのであります。即ち自己實現の生存競争であります。丁度代議士が自分の選舉さるべき地盤を争つて自分の地盤を擴張し、他人の地盤を切り崩すに同じやうに、此の觀念と云ふものは、肉を所有して自身の姿を肉の上に現はさうとして、他の觀念を押し斥けて、自分の要求を通さうとする生存競争が始るのであります。そして其の生存競争に勝利を得た觀念が、肉と結び付いて、自己の姿を此の肉の上に現はするのであります。けれども觀念は、各

自孤立して居ては、此の生存競争に勝つことが出来ないのであります。政治家が一方に政友會、一方に憲政會を云ふやうに、それ／＼黨を作つて競争をするやうな塩梅に、民族は日本民族、猶太民族、其他何々民族を云ふやうに、共通の目的を持つて居るものが一致團結して競争するが如くに、觀念も各自孤立して居つては十分に肉を所有することが出来ないので、相互に關係のあるもの同志が、一致團結して肉を所有しようとする運動が起るのであります。其の結果、人格が出来るのであります。

二、人格の意義

人格とは何であるか。自己實現のために肉を所有する觀念の共同團體なのであります。自己實現にお互に共存的關係を有する觀念同志が合同

して、數百萬億の細胞から成る此の身體を舞臺として、共同生活を営み居る團體が人格なるのであります。それで人格は單なる觀念にあらず、亦單なる肉にあらず、肉を所有する觀念の共同生活團體を云ふことになるのであります。倫理學の書物などには、人格は人の人たる所以であるといつてある。そんなことを云つては人格の意味が分りませぬ。肉を所有する觀念の共同生活の團體であります。人間は人間が生きる必要上、共同生活の社會を構成するに同じ意味に於て、觀念も觀念が、其の自己實現上、お互に共存的關係を有するもの同志が、協同一致して、共同生活の團體を造る。是は生命の根本原則であります。大きい所では宇宙全體に就いて云ひましても、小さい所では觀念に就いて云ひましても、多數のものが協同一致して、共通の目的に向つて活動するに云ふことが、生命全體に共通する原則であ

ります。文化生活は云ふこともさう云ふ意味のものゝ私は解釋します。文化生活は、さうかするに享樂主義を云ふやうなものゝ解釋されて居ます。人はさうなつても、自分さへよければよいと云ふ具合に、世間の迷惑は構はず、自分の都合のよいやうに生きることであるに、新しい女や新しい男によりて、勝手に定義されて居ります。然し、さう云ふのは、生命の意義に適しないと思ひます。文化生活は社會全體の幸福を増進し、其の社會のうち、仲間入して、世間の人々と共に、人生の趣味を味つて行く所に、文化生活の意味があると思ひます。世間から孤立して、自分ばかり生の幸福を味はふと云ふのは、自己主義である。享樂主義である。斯の如き自己主義や享樂主義による生活には、斷じて生きることの幸福は得られないと思ひます。文化生活は社會から孤立して、自分一人で生の幸福を味ふとしない

で、社會の人々を兄弟の如く仲善く、お互に助け合つて、人生の幸福を味ふことでもあります。生命主義から言ふに、共同生活の仲間をはづれて、孤立して生きやうとするは罪惡です。小にしては家族的な生活大にしては宇宙生活、其の間では文化生活。結局生きるに云ふことは、共同生活から孤立して自分だけ楽しむと云ふことではなく、大なる生命の流の中に仲間入して、生命の根本を味つて行くに云ふことが、生きることの根本的要求であります。觀念も斯る生命の意義に基いて、相互の自己實現に都合よきもの同志が、共同生活の團體を造ります。それが人格となるのであります。斯くして行くのが生命の原則であります。共同生活から孤立して、自分ばかり幸福を得やうと云ふことは、生きるに云ふ本來の目的に背いて居るのであります。そこで人格とは、人の人たる所以であるに云ふ抽象的説明では意味を明か

にすることは出来ない。人格は肉を所有してゐる所の觀念の共同生活である。さのやうに觀念が共同した所で、自分の要求を肉の上に實現することが出来なかつたならば、人格ではないのであります。活動がなければ人格はないのであります。又活動があつても、其の活動が物理學上の盲目的の力の活動であつて、テレオロジイのないものは人格にはなりません。觀念の活動にはテレオロジイがある。此のテレオロジイが人格の中心であります。即ち人格は肉を離れた單なる觀念ではなく、ミ云つて觀念のテレオロジイより離れた單なる肉の働きでもないのであります。無形の觀念のテレオロジイが、肉の上に現はれて、其所に人格ミ云ふ一つの生命が出来る譯であります。

三、潜在觀念

右の如く肉を所有する觀念が共同生活の團體を構成して人格が出来るのであります。所で無數の觀念の或る一部分だけが肉を所有して、多數のものは肉を所有するこゝが出来ずして終る譯であります。それで人格の構成に仲間入をする觀念ミ、仲間入りするこゝの出来ない觀念ミ、二種類の觀念が出来る譯であります。人格の構成に仲間入りするこゝの出来た觀念、即ち肉を所有して自己實現の仲間入りをするこゝの出来た觀念ミ、肉の活動に縁のない所の觀念ミの二つに分れるのであります。人格の構成に仲間入りして、自己實現をなして居る觀念を顯在觀念ミ申します。そして人格の中に仲間入りするこゝの出来ない觀念は、人格の外に姿を隠くして

居るので、それを潜在觀念ポテンシャルと云ふのであります。此の潜在觀念には我々が生れて後、自己の經驗によつて得た潜在觀念、即ち後天的潜在觀念もあり、また無限の過去から遺傳された業力カルマとしての潜在觀念、即ち先天的潜在觀念もあるのであります。普通心理學で論ずるのは後天的潜在觀念ばかりでありますけれども、生命論の上からは先天的潜在觀念をも論ずるのであります。我々はアメーバのやうな下等動物の時代から人間の世界に至るまで、無限の歴史を辿つて來てゐるが、其の間の經驗による無數の業力は、人格の上に現はれてゐるのもあり、人格の上に現はれずして隠れてゐるものもあります。然らば如何なる業力が人格の上に現はれて、如何なるものが潜在觀念として隠れてゐるか、と云ふのに、其の顯著なる實例は男女と言ふ性の區別で之れを見るこゝが出来ます。男女と云ふものは、是は人格の差別で

あります。人格としての一大差別は男女のセックスsexであります。

大體、此の原始生命には、男女の區別は胎藏されて居るけれど、肉の上に現はれて居りませぬ。されば最下等動物のアメーバの時代には男女はないのである。無性生殖で一つの體が二つに割れる、又之れが二つに割れる、次から次へに無數に割れて行く。そしてセックスの區別のない同じものが、無數に増殖されて行きます。けれども唯單に生物が無數に増加して行く、と云ふことは、生命の目的には適はぬものです。よりよき未來を創造する、と云ふこゝが、生命の根本要求である。今日よりも明日はよりよく、明日よりも明後日はよりよく、今年よりも明年はよりよく、明年よりも明後年はよりよく、今世紀よりも來世紀はよりよく、と云ふ具合に、次から次へに、よりよく發展する、と云ふテレオロジーteleologyがなければならぬ。之れが生きんとする

要求の目的であります。詰り生きるに云ふことは、單に同じ状態を繰り返してゐるころではない。次から次へ、よりよきものに移つて、向上發展するのが生命の要求である。所がアメーバはいつ迄も無性生殖をして、單純に同じころを繰り返してゐるから、生命の目的に適合しない。そこで斯くして行く間に、何時の時代かにセックスの區別が現はれた。其の目的はよりよく未來を造るためであります。親よりも子、子よりも孫、次ぎ次ぎに生れて來るものを、祖先よりもよりよくするには無性生殖ではいけない。仕事の分業の意義に基き、男女といふセックスの區別が出來て、分れたものが合體し、茲によりよき子供を生むといふころが、性の區別の起る理由であります。だからセックスの區別はよりよき生命を創造せんとする、生命のテレオロジから生じたものであります。それで生命の根元は單なる男

にあらず、單なる女にあらずして、男女兩性を胎藏したものであります。従つて現在の人間も、其の根柢に於ては、亦男女兩性の念を胎藏して居ります。けれども此の兩性は同時に自己實現するころが出來ませぬ。男性が顯在となりて女性が潜在すれば、男性人格が出來、女性が顯在して男性が潜在すれば、女性人格が出來ます。男女兩性の人格は斯くの如くして出來たのであります。それで、我々は男性の業力が中心となつて自己實現してゐるから、男として人格の姿を現はしてゐるけれども、其の人格の奥底には、女となるべき業力が潜在觀念として、ちやんこ備つて居ります。丁度生物學で云ふ所の隔世遺傳と同じであります。例へば甲人の時代に癩病が現はれても、其の子の乙人の時代にそれが現はれぬなら、それでもう病氣が消滅したか云ふさうぢやない。其の孫の丙人の時代になつて再び其の病氣

が現はれるこころがある。甲から丙に至る其の中間の乙に於ては、表面に病氣はなくとも、病氣を生み出すべき業力が備つて潜在して居る。かう云ふ場合に、祖先に病氣があつたならば、其の病氣は私共には隠れて居つても、私共の子孫に於て再び現はれる。だから、病氣の表面に現はれぬさういふのは、病氣の業力が潜在して居るにすぎぬ。病氣を持つて居らぬさう思つたのは、其の念力が潜在的に隠れて居るに過ぎぬ。其の隠れて居た念力が、子孫に至つて又現はれて病氣となるのである。男女の區別もその通りであります。今、私共は男でありますけれども、私共の人格の底には、女さうなるべき業力が潜在して居ます。そして私の子供に至つて、私の人格の底に隠れて居た女性の業力が實現して女が出来る。又大體から言つて、男性の人格でありながら、其の精神體質の上に、女性の混合して居る人もある。之れを反對

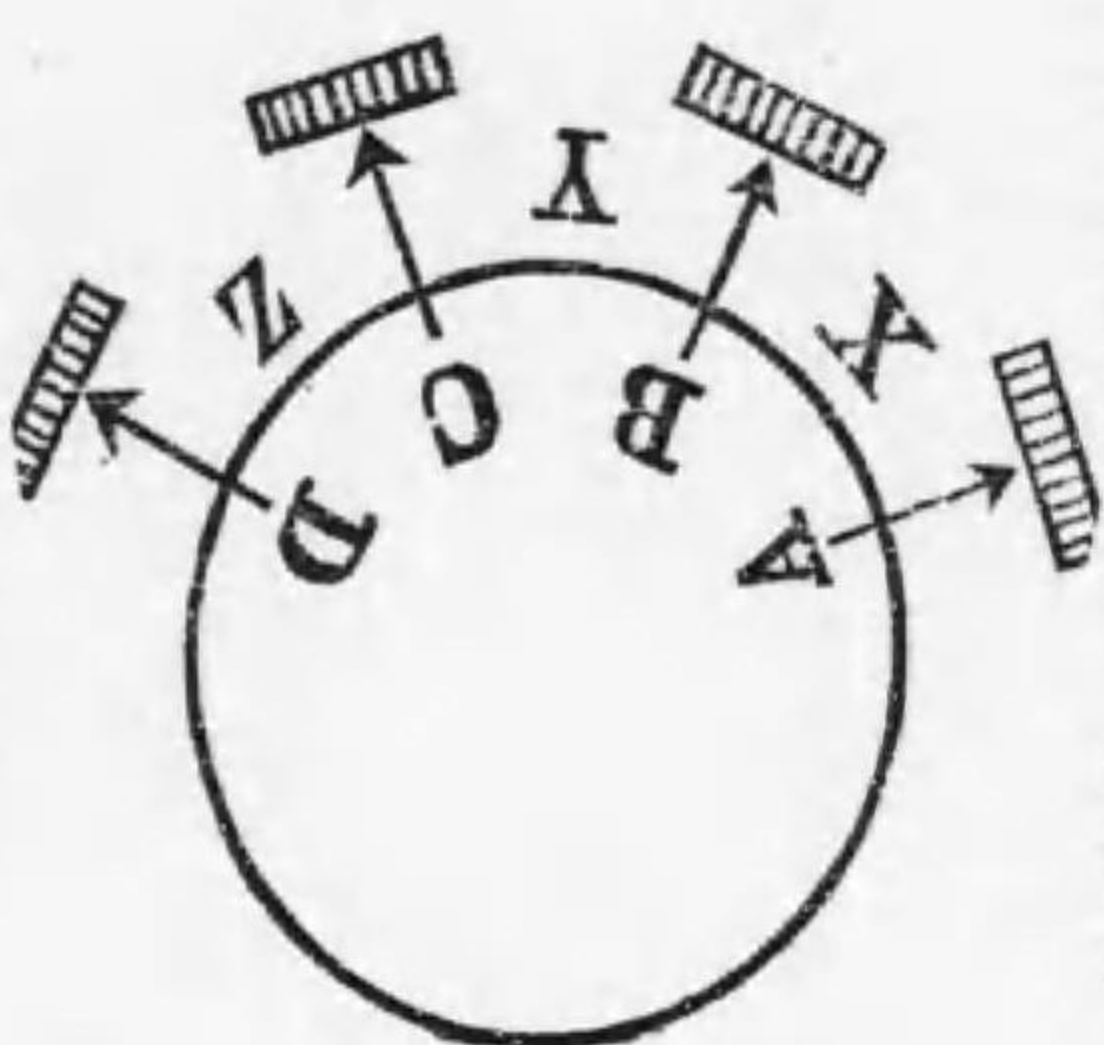
に、表面が女性の人格であつて、内面に男性の性質を混合して居る人もある。人格の理想から云へば、男は徹頭徹尾男性の姿を有つてゐるべきである。女はまた何處までも、精神肉體共に女性的なるのが女の理想であります。生物の進化のテレオロジーは、總てさうなつて居ります。最初は男女の區別も不明瞭であるが、段々下等動物から人間に進むに従つて、男女の區別が明瞭になつて來ます。肉の構造、精神の作用、總てが男性、女性と著しく分れて來ます。未來に於ては、この區別が益々明瞭になつて、男性は徹頭徹尾男性の筋肉、精神を備へ、女性は徹頭徹尾女性の筋肉、精神を備へるさう云ふ風に、區別が判然とされるのが生命の理想であります。けれども、それは理想であつて、現實の人間に就て論ずるなれば、理想通りの男も、理想通りの女もないのであります。さうのやうに完全な男と言つても、身體の或るさうかに女性

らしい所があり、精神のどこかに女らしい所がある。又人格は女であつても、どこかに男らしい所がある。亞米利加邊りには、女で髭のある者があります。又男であつても男らしくない、鬚髯がなく、皮膚なごも滑らかな、女らしい男があります。もつと甚だしいのなる二形ふたなり云ふのがある。一つの身體に男女兩性が同時に自己實現してゐるのであります。本來、人間は男女兩性の業力を備へてゐるのです。けれども兩方一緒に現はれては始末がつかぬ。生命のテレオロジーに適ひませぬ。男性か、女性か、孰れかの一方が自己實現して男或は女となり、他の一方は潜在となるべきであります。つまり人格は一つの内閣です。男性が中心となつて内閣を組織するならば、肉も精神も總て男性的に揃つて行かねばなりません。女性が中心となつて内閣を組織するならば、肉も精神も悉く女性になるべきであります。

ます。それがさうかするに兩性混合する。内閣で云ふならば、聯合内閣のやうなものである。人格にもさう云ふ鵝的のものが出来るのであります。けれども男女兩性が同時に人格に現はれては生命のテレオロジーに合はないのであります。生命のテレオロジーは分業であります。一方に於て男一方に於て女。そして男女兩性が合體して未來を作る。人格は男か女かの一方に片寄るのが人格のテレオロジーであります。教育上に於て人格の完成、人格を圓滿に發達させるに云ふことを言ひますが、これは生命云ふものを理解せず、好い加減に定義するからさう云ふことになるので、かゝる圓滿は生命のテレオロジーに合はないのであります。人格は一方に偏すべきものである。然し偏せんが爲に偏するのではないのであります。偏したる所のものが、生命のオーケストラの仲間に入りて、それがきちん

當筈まるやうにしなければならぬ。偏しておいて、全體の生命のオーケストラに持つて来るこ、きちんこ水も漏れないやうに當筈まる時に、人格は圓滿になるのであります。人格の圓滿こ云ふのは、生命のテレオロジーから孤立しては無意味であります。生命のテレオロジーこ云ふ大なる舞臺があるから、其の舞臺に當筈まるやうに、分業的片寄りを實現して來たのが、人格の完全なるものである。教育學者はさうかするこ、人格の圓滿こ云ふことを、只徒らに人間こして有する凡ゆる一切の性能を發達させるここ、解釋しますが、それは間違つて居ります。男性は飽迄男性で、女性も飽迄女性になつて、各々相手の所有せざる能力を持ち、そしてそれが一家族の生活に結びついて、始めてよい未來が生れるのであります。人格こ云ふものは、さう云ふテレオロジーに基いて出來てゐるこ思ひます。

次に我々が生れてから以來、經驗によつて得た無數の觀念の内、其の一小部分のみが顯在して、大部分は潜在的に隠れて居ります。其の隠れてゐる觀念は、いつまでも隠くれたなりで、何事もなく終るかこいふに、必ずしもさうではないのであります。一寸でも人格に隙間があつたならば、其の油断に乗じて自己實現をなすべく機會を狙つてゐるのであります。人格



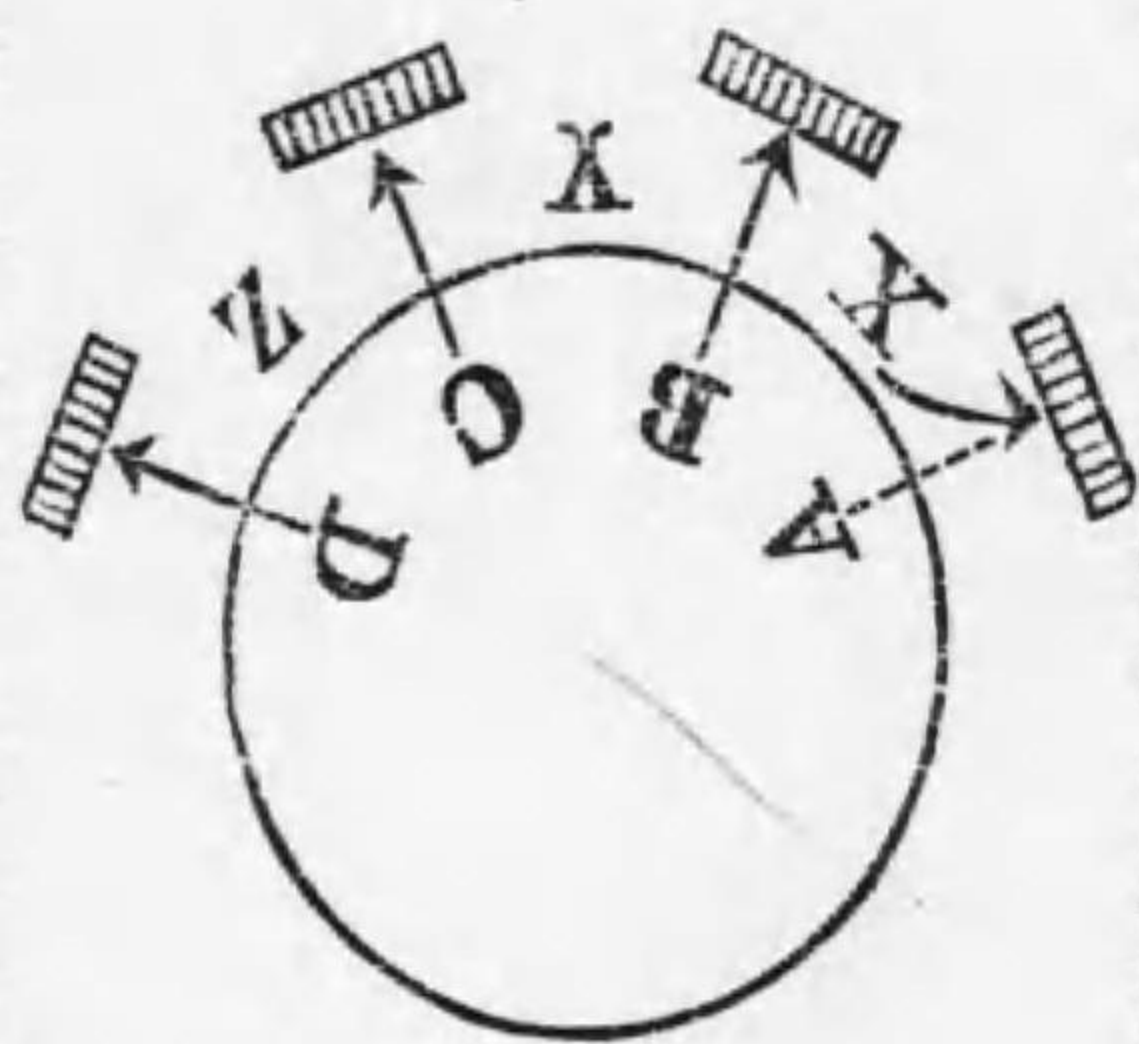
内でA B C Dこ云ふ觀念が共同生活を營んで、そして各々が肉を所有してゐるこします。所が肉を所有するここの出來ない潜在觀念が人格の外に隠れてゐる。之をX Y Zこします。此の隠れて居るX Y Zは、人格に一寸でも隙があつたならば、其の肉を侵して、之を自分のものに使用しよう

こ、眼を見張り、機會を狙つてゐるのであります。恰も政黨のやうなものであります。今は憲政會の内閣で、若槻さん濱口さん云ふ連中が日本中の肉を使用して、自分の要求を實現して居ります。それが人格に相當します。所が別に政友會、政友本黨云ふやうなものが、内閣の外に潜在してゐて、内閣に一寸でも隙があれば、それを倒して、日本中の肉を自分のものにしようと思つてゐます。Xは床次竹次郎さん、Yは田中義一さん云ふ具合であります。人格の外に隠れてゐる觀念は何事もせず、無事に治つて居るものではないのであります。そこで人格と潜在觀念との競争が起つて來ます。

四、人格と潜在觀念の競争

我々の人格は、却々油斷の出來ない危いものであります。人格がいつも

確乎として居れば、よろしいのですが、我々の人格に何か變動があるに、隠れてゐる潜在觀念は、其の隙間に附込んで、いろいろなことをします。例へば



Aの觀念が筋肉を所有して居るけれども、筋肉を握つてゐる其の力に一寸でも弱味が出来るに、潜在觀念のXが活動し出して、其の肉を占領し、それを舞臺として、自己實現をしようします。さう云ふやうに、潜在觀念が人格の弱味につけこんで、其の肉を一時占領して、之を舞臺として自己實現する時に生ずる現象を、自動現象と名づけるのであります。それで自動現象は、人格自身の活動ではなくして、人格の外に隠れた潜在觀念から生ずる活動であります。例へば吾人が自分の言ひたいことを、此の舌で云つてゐる

る時、此の舌は人格の所有物です。吾人はいつでも自分の人格の要求によりて、此の舌を動かしてゐるのであります。けれどもさうかするに、此の舌が人格の要求によりて活動せずして、人格以外の潜在觀念によりて活動するこゝごがあります。嘗て私の所へ、かう云ふ患者が來たこゝごがあります。

「私はさうかするに自分の言はうに思はないこゝごを云ふので困ります。これはさう云ふ具合にしたらよいでせう。」と言つて、病氣の様子を私に説明して居る最中に、私の家の門前を豆腐屋が「トーフーイ」と呼んで通り過ぎました。するに、其の患者が大きな聲で「トーフーイ」と云つて、そして、「此の通り私はこんな馬鹿な事を云ふ積りではなかつたのですが、思はず言ふので困ります。」と言ひました。詰り當人の人格は、かゝるこゝごを言はうと思つては居らないけれども、「トーフーイ」の觀念が人格の外で活動して、舌の肉を一

時占領して喋べつたのです。即ち隠れてゐる觀念が、人格の肉を一時占領して、自己實現をしたのであります。さうかと思ふに、人の悪口を知らずに云ふ患者がある。少しも悪口を云はうにする心持がないのに、人の悪口を云ふのです。「先日は大へん御馳走になりました。有難うございました。コソ畜生。」こんな工合に言ふのです。そして直ぐ後に「私はこんなこゝごを言ふ積りではないのでございますが、病氣でつい口に出るのですから許して下さい。此の馬鹿野郎。」とやるのです。つまり舌の筋肉が人格によりて使用されて居るけれども、何かの拍子に、人格外の潜在觀念に使用されて、かゝるこゝごになるのであります。

亞米利加のジェームス教授はアンナ・ウインソールと云ふ患者につき、甚だ面白い事實を報告してゐます。彼女の右手は潜在觀念により支配され、

そして彼女の人格に對しては有害なる行動をするのであります。彼女は之を自分の右の手であることは認めて居りません。彼女はこれを自分以外のものとし、そして自分に害を與ふるものとして認めて、之を「切株」と呼んで居りました。此の切株は文章を書いたり、畫を描いたりするのであります。けれどもアンナ・ウインソールは切株の爲すことについて、何等の興味をも感じて居りません。其の文章や畫につき「誰れが描いたのか」と質問するに、彼女は、

私は書きません、それは株が書くのです。私は彼が何を書いてゐるか知りません。私は株の爲すことには構ひません。

と答へるのであります。時とするに此の切株は頭髮を抜いたり、衣服を裂いたり、物品を破壊したり、種々の亂暴を働くのであります。するに、人格に

屬する左手が、こんなことを爲せまいと、種々反抗するけれども、切株は強迫的に暴れるのであります。彼女は口惜しがつて涙を流しつゝ、左手を以て切株を撲つたりすることがありました。

ヒステリー患者は全身の凡ての筋肉を、一つの人格の下に統一して働かせることの出来ない精神状態にあります。尤も如何なる人でも、完全に全身體の肉を統一することは、殆ど出来ない。けれども普通人は先づ大體に於て、全身の筋肉を一つの人格を統一して働かしてゐる譯であります。所がヒステリー患者になるに、身體の筋肉が幾つかの組に分れ、さうして各部が異りたる觀念の組によつて活動して居ることが能くあります。數百萬億の細胞から出來て居る身體は、元龜、天正時代の群雄割據と同様に、或る部分甲組の觀念に支配され、或る部分は乙組の觀念に支配されてゐると云

ふ塩梅に、身體の筋肉が種々に分裂して居つて、全體を支配する統一人格がない。是がヒステリー患者に能く見る現象であります。例へば喉の所が詰つて、思ふ様に物を飲むこゝが出来ない、食べようと思つても自分の喉でないやうで、物を飲むこゝが出来ないに訴へる患者があります。是は喉の筋肉の一部分だけ、患者の人格の支配から脱して居るのであります。又今まで自由に動かすこゝの出來た手が、忽ちにして動かされないやうになるこゝもあります。是は今まで人格の支配をうけてゐた手の筋肉が、何かの理由で、俄かに人格統一から脱出して、其の支配をうけぬやうになつたのであります。又俄かに眼が見えぬ様になつたり、耳が聞えぬやうになつたりする。是は感覺機關が人格統一から離脱した結果であります。健全な人格は凡ての感覺機關を統一して所有して居ります。けれどヒステリー患

者に於ては、感覺機關が人格統一から脱して、用をなさぬこゝがあります。其の脱失した感覺機關のため、眼が見えぬやうになつたり、耳が聞えぬやうになつたりするのであります。

又記憶が人格によりて完全に統一されてゐるならば、経験したこゝは如何ほゞ微細なこゝでも、悉く思ひ出され得る筈であります。けれど實際に於ては、さう云ふこゝはないので、たゞ一部分の記憶だけが人格の内に統一せられ、其の他の部分は人格の外に隠れて居るのであります。そして時々するに、此の潜在記憶が眼の網膜を刺戟して、色々な幻覺を見せるこゝがあります。夢は其の一種であります。私が女子大學で心理學の講義をして居た頃、夢に關する經驗を書かせたこゝがありました。其の内に、次の如きものがありました。一學生は風邪なごで發熱するに、能く城の景色を

夢に見るのであります。而もそれは普通の夢と異つて、極めて明瞭で、物見櫓を初めまして、其の周囲の光景が丸で實際の城の如くであります。然し當人は別段不思議とも思はないで、それなりで過ぎて來ました。所が熊本に奉職して居る兄なる人が、頻りに遊びに來いと言はれるので、彼女は或る年の冬休暇を利用して熊本に行きました。彼女が兄の家に着いた時は暮れ方で、非常に疲れて居り、且つ少々不快でもあつたので、直に寢床に就いて休みました。所が、其の翌朝、洗面を済ましてから二階に登り、不圖熊本の城を見るに、不思議や其の光景は發熱中の夢に見た城と寸分違はぬのであります。初めて見た熊本の城が、何故嘗て夢に見た城と一致して居るのであらうか。彼女の家は神戸にある。嘗て熊本の有様を見たことがない。それなのに、何故其の城を夢に見るのであらうか。彼女は不思議に思つて之

を兄に語つても、彼は唯馬鹿にして一向相手にして呉れぬ。然し彼女は如何にも不思議でならぬので、家に歸りて此の事を父母に物語りました。するに、父母は是に就いて説明して呉れました。それは丁度、彼女が二歳で、兄が七歳の時の事である。父母は兄を祖父母の許に留め置き、彼女一人を伴れて熊本に赴き、二年間程其處に奉職して居たことがある。其の時住居した家が、丁度兄の現住所の近所で、矢張り二階造りであつた。母と女中とは、時々二歳になる彼女を抱いて二階に登り、城を指して見せて遊ぶのであります。父母は斯くの如く物語りました。それで夢の理由が充分説明出來ます。即ち發熱中に夢に見る城は、彼女が二歳又は三歳の時、熊本で見た城の記憶によりて生ずるのであります。此の記憶は平素は彼女の人格の外に隠れ居りて、發熱中に働き出し、彼女の網膜を刺戟して、城の夢を見せる

のであります。

又、こんな例があります。私の所へ或る男がやつて来て「私はさうも風を引いて熱が出るミ、蝟坊主が現はれ、捻ぢ鉢巻で、ステ、コ踊りをして困りますが、何ミか出来ませぬか。」ミ訴へたのであります。そこで私が患者の過去を研究した所其の原因が分つたのであります。二ヶ月程前に、此の患者が、或る人に催眠術をかけられたのです。そして術者が「お前の前で蝟坊主がステ、コ踊りをやる、面白いネ。」ミ云つて、暗示を與へたミころ、彼はそれをありくミ見たのであります。斯様に幻覺を見せた場合、催眠術を解く時には「モウ蝟坊主はなくなつた。」ミ言つて、其の暗示を取り消しておかなければならぬのであります。所が此の催眠術者は何を狼狽したものか、暗示を取り消さずに被催眠者の目を醒ました。目が醒めてから、彼は催眠中

の經驗について何も記憶がありません。けれど催眠状態に於て與へられた暗示が、取消されないで繼續してゐるから熱病に罹つた時に働き出して、幻覺ミなつて見せるのであります。即ち潜在觀念の働きであります。ヒステリー患者には、さう云ふミこころが澤山にあります。人から罵られたミこころがありますれば、人格ミしては人に悪口を言はれた覺えがないミしても、それが幻覺ミなり、仕舞には、世間の人が皆、私に悪口を云つてゐるなミ、申します。さうかミ思ふミ、手が動かない。足が動かないミ云つてゐるのに、其の手や足が當人の知らぬ間に自動し出すミこころがあります。是は手や足が人格の統一から分裂して居て、人格の要求によりて動かないで、人格から獨立した觀念によりて動くのであります。

又、ヒステリー患者が何か云ひたい事、爲したい事があつても、周圍の人に

壓せられて、それを言ひ得ず、行ひ得ぬ時には、それが潜在觀念となりて、身體の何處かに自己實現して、種々の變態現象を惹起するものです。たゞへば言ひたい事を思ふ存分に言はれない時に、それが熱となりて現はれるこゝごがあります。或はそれが胃腸の働きを害して、不消化を來したりするこゝごがあります。言ひたいこゝごがあつても、それが言はれない爲めに、熱を發するこゝごはヒステリー患者に澤山にあります。詰り自己實現を制止された觀念が、人格の外に隠れ居りて、身體に働き掛けて、種々の變態現象を惹起するのであります。日蓮宗では之を罪障と云ひ其の罪障を亡ほせば病氣が治ると云ふのであります。それは潜在觀念を解放して、自己實現の要求を果たさせるか、左なくば説諭を加へ、沈靜させるこゝごであります。又宗教には懺悔と云ふこゝごがあるが、これは矢張り觀念の變態活動を治するのに必

要であります。自分の心に秘めてゐる罪惡も、人格の力が強ければ、何時までも何時までも隠し通すこゝごが出来るが、然し精神統一の薄弱なる女なきに於ては、それを秘し通すこゝごが出来ません。若し無理に秘して居ると、只今申した通り、發熱したり、胃腸の働きが悪くなつたり、手足の活動が不自由になつたり、眼が見えなくなつたり、耳が鳴つたり、其他種々の變態現象を起します。そこで自分の持つてゐる罪惡を、名僧知識に話して懺悔し、神佛の許しを受けるに、罪障觀念がスツカリ沈靜して胃の働きがよくなり、手足の働きが自由自在になり、頭が軽くなる、眼や耳も聰明になり、身體が軽くなつて、大變愉快になるのであります。

それでヒステリー患者の病氣を治すこゝごの根本の方法は、心に思つてゐるこゝごをば何でも云はせるこゝごです。フロイド氏の精神分析と云ふのは、

有名なヒステリー治療法であるが、これも詰り隠れてゐる觀念に自己實現の要求を果させ、それによりて變態現象を治することに過ぎぬのであります。されば此の治療法の創始者たるブロイエル氏は、之を談話治療と名づけて居ります。胸中に秘してある觀念を、自由に談話に發表させて、病氣を治すからであります。又滑稽的に煙突掃除と名づけます。胸中に蟠つて居る種々の觀念を一掃するのが、煙突の煤を掃除するやうだからであります。だから私は、ヒステリー患者の病氣を治す根本は、言ひたいことを言はせるにあると思ひます。

五、強迫觀念

一寸茲に附加へて置きたいことがあります。それは強迫觀念であります。

強迫觀念とは人格中の一觀念が、他の觀念を壓倒して、自己實現せんとする力強い觀念のことであります。詰り横暴なる主我主義の觀念であります。同じ人格の中にある觀念と觀念とは共同一致して、同一の目的實現の爲めに働くのが理想であります。所が其の人格の中にある觀念と觀念とが、衝突するところは我々が始終經驗してゐる事であります。さうして其の中の或る觀念は、特に筋肉と連絡して居つて、他の觀念を壓倒して自己實現するところがあります。悪い觀念だから、押へやうにしても押へるこゝの出来ないやうな、或る特殊の觀念が人格中に勢力を得て、他の多數觀念を押へて働かせないやうにするところがあります。それを強迫觀念と云ひます。共同生活の理想から云へば、或る一つの觀念が強いからと云つて、其の觀念ばかりに、凡ての仕事をなさしむるは間違ひである。それは社會と同じで

あります。社會は共同生活の所ですから、或る金持が金の勢力を利用して、社會民衆の迷惑となるやうなことを、我儘放題にやつたならば、社會の共同生活が紊れる。これと同様に、人格にありても、一つの觀念が自分自身だけに都合のよいやうに我儘な活動をせず、全體の觀念と共同調和して行くのが理想であります。所が或る觀念が我儘な行動をやつて、他の觀念を押へ、自分だけ自己實現を逞ふることがある。それが強迫觀念である。例へば物を見るに、わけもなく其の物を數へなければならぬ人があります。一寸數へ損うと後へ戻つて、又始めから數へる。何のために數へるか問へば何の目的もあるのではない。唯、數へて行かなければ氣が濟まない云ふのであります。又、或は道を歩るきながら、唾を何遍吐いたと云ふやうなことを日記帳に書いてゐるのがあります。有名な豪傑ナポレオンは道を

歩きながらウキンドーの數を數へた人であります。あんな人でも強迫觀念を持つて居つた。英吉利のラセラス傳を書いたジョンソン氏は道を行くとき、ポストの頭を撫でなければならぬ人であつた。相手と話の興に乗つてポストの頭を撫でるのを忘れることがある。その時には、一寸待つてくれと言つて戻つて行つて、撫でるのであります。考へて見るに實に馬鹿々々しいこと、充分に承知して居りながら、其の觀念が現はれて來るに、さうしても自己實現をなさしめなければいけないのであります。甚だ尾籠な話ですが、私の友人に電話室に入りさへすれば、小便がしたくなる人があつた。何故そんな強迫觀念が起つたか云ふに、是は私が東京に居るとき勤めて居つた眞宗大學の附近に住んで居た人で、筆、墨等の文房具類の商賣をして居つたのです。其の家には電話がないので、何時も用事があれば、眞宗

大學へ電話を借りに行つたのです。或る日のこと、小使が来て「電話がかゝりました、早く来て下さい。」と言ひました。其時、主人は小便がしたかつたけれども、それをこらえて電話室に入つて話をしたのです。電話は二分か三分で済むと思つてゐたのですが、其の電話が長い話で三十分も四十分もかゝつた。其間にいよゝゝ小便がしたくなつて来る。然し「モシ／＼今小便がしたいから待つて呉れ」と云ふことも出来ない。電話も聞きたい、小便もしたい、内憂外患交々至るで、我慢に我慢をして電話室を出たのです。其事あつて以來、別に小便がしたくなくとも、電話室に入るこゝ、便氣を感じて困つた、困つた。」と言つてゐるのであります。然るに電話室を出るこゝ、もう鼻唄を唄つて小便のこゝを忘れてゐる。又、自殺強迫觀念と言つて、自殺して見たいと云ふのがあります。私の所へ或る書生が自殺をしたいが、さうし

たら宜らうと、相談を持込んだことがありました。えらい相談もあつたものです。然しそれは催眠術で、すぐに治りました。亞米利加のジェームス、教授の書物には、極端な例が擧げられてあります。或る大學で、二階の窓から學生が飛降りて大變に怪我したことがありました。それはそれで済んだけれども、他の學生が二階の廊下を通つて居つたのであります。丁度右の學生が飛降りた云ふ窓の所へ来るこゝ、自分もこの窓から飛降りたらさうだらうと云ふ觀念が、忽然彼れを襲つて來ました。寢ても覺めても、其の事を思ひ續けて、さうしても忘れるこゝが出来ない。即ち自殺強迫觀念であります。彼はかゝる觀念に苦しめられて、さうするこゝも出来ないのです。自分の信賴してゐる牧師の所へ行つて打ち明けました。「私はあの窓から飛降りて死んだらさうかと思つて居りますが、忘れやうと思つてもくゝさ

うしても忘れるこゝが出来ません。死んだ方がよいでせうか、さうでせうか。」と相談したのです。斯る場合に大抵の人は「死んではいけない。」と云ふのです。然しかゝる人にさう云つたまで、抑えられるものではありません。そこで牧師はさう云つたかみ云ふに、反對に言つたのです。「さう云ふ觀念があつたらば、仕方がない。早く死になさい、早く死になさい。」と云ふに、青年は「能く解りました。おかげで死ぬ氣が無くなりました。」と答へ、それきり自殺觀念が無くなりました。此のやうに、かゝる時には寧ろ抑えるよりも開放した方がよい。子供が泣く時に、泣くな泣くなと云ふに、益々泣くが泣けく、と云ふに止める。これと同様に、強迫觀念は無暗に抑えれば抑える程、増長して活動をするものであります。

夢と云ふものも、或る意味に於ける強迫觀念であります。一體人間は精

神が能く統一して居れば、眠るこゝには熟睡し、起きる時にはハッキリ目を醒す筈であります。西洋の諺に「よく遊びよく働け」といふこゝがあります。が、成る程その通りで、精神の健全なる人は遊ぶこゝには、スツカリ仕事を忘れて遊び、仕事にかゝつたこゝなるこゝ、すつかり遊ぶこゝを忘れ、全身悉く仕事に向ふ。これは人格の理想であります。神経衰弱的に頭が弱つて来るこゝ、勉強して居りながら、今頃は淺草、向島の花は咲いたゞらうな、と云ふやうなこゝを思ひ出して書物を讀んでゐる。そんなに淺草や向島の花を思ひ出してゐる位なれば、一層淺草、向島に遊んで來ればよい譯であります。偕て淺草、向島邊りに行つて花を見て遊ぶこゝになるこゝ、もう試験が近付いたから、斯んなに遊んで居るこゝが出来ぬ。」と云ふやうなこゝを考へる。遊ぶこゝに勉強のこゝを考へ、勉強のこゝに遊ぶこゝを考へる。これは精神不

健康な人である。遊ぶ時には徹頭徹尾遊び、勉強する時には徹頭徹尾勉強する。斯る人は頭の良い人です。それが人格の理想であります。それと同じやうに、「よく眠りよく醒めよ」云ふのは人格の理想であります。眠るときには全身悉く眠り、醒める時には数百万億の細胞が皆醒めればよいのであります。けれども人格が不統一になつて來ますと、眠るべき時に夢を見る。つまり睡眠中に働かなくともよい觀念が働くのであります。心理學的に見れば、眠るべきときに、夢に邪魔されて眠られぬのですから、強迫觀念の微弱なものであります。精神衰弱の人は、就寢間際に雜談をやつたり、小説を讀んだり、或は芝居なきを見て來ると、それが雜念になつて、睡眠を妨害し、夢を見させるものであります。甚しきは芝居を見るに一週間もその觀念に強迫されて、碌に勉強することも出來ないものがある。私が女子大

學で教鞭をこつてゐた時に、一人の生徒が心理學の講義の時、筆記もせず、鉛筆を指に挟んで頬杖つきながらニコ／＼笑つて居た。之れはあまりに感心して聽いて居つて、筆記するこゝが出来ないのかと思つて、後で聞いて見るに、さうでありませんでした。彼女は「私は一週間前に團十郎と菊五郎との勸進帳を見たのです。それから一週間程たちましても、富樫や辨慶の姿が目の前にちらついて、講義を聞く氣になれません。」と答へました。これは結局神經の弱い人です。芝居を見るのも悪くはないけれど、一度芝居を見るに、其の觀念に囚はれて、一週間も仕事の出來ない様では、即ち芝居が一時強迫觀念になつたので、宜しくないこゝであります。原坦山老師が或る和尚さんと一緒に旅行した時に、小さい川があつて橋が架かつて居らなかつた。坦山老師は連れの和尚と共に尻をからけてヂャブ／＼水を

涉つた。所がその後の方に女が居りまして「私も渡りたいのですが、女ですから渡るこゝが出来ません、どうか私を負ぶつて戴けますまいか。」と頼んだ。坦山老師はよし／＼と其の女を負ぶつて渡してやつた。そして二人の僧侶が川から上つて一緒に歩いた。所が一人の僧侶は始めと違つて、坦山考師が話をしても、一向に答へもせない。二三時間も経てから、其の僧侶が云ふには「原さん、貴方はどうも怪しからぬネ。」何だ。「大體、僧侶の身にして、あんな女なきを背中に負ふと云ふこゝがありますか。」すると坦山老師は「お前はまだあの女を背負つてゐるのか、俺は夙に女は卸した。」と言つて相手の和尚を一本參らしたと言ふこゝであります。詰り女を背に負つても、其の時限りで、後にはサツパリ忘れて了へば別に罪にはならないのであります。それと同様で芝居を見ても、後にはサツパリ忘れて了つて、勉強が

出来ればそれで宜しいのであります。けれども精神の弱い人は、一遍芝居を見るに、其事が雑念となつて、勉強の妨害となるから宜しくありません。さう云ふのも強迫観念の一種であります。詰りどんな観念でも、人格の統一を缺くときは、強迫観念として我儘な活動をするのであります。

六、人格の分裂

已に申上げる通り、潜在観念は自己實現の爲め肉を所有すべく、一生懸命にその機會を狙つて居ります。けれども各々の観念は、孤立しては到底人格と闘ふこゝは出来ない、人格と力を比べるこゝは出来ない。そこでX、Y、Zは各自孤立して居ては、其の力が弱くつて目的を達するこゝは出来ないから、潜在観念の中の志を一つにするこゝの出来るものが寄り集つて、茲に

潜在觀念の共同團體を拵へ、さうして其團體が人格に向つて挑戦します。其結果、普通の人格の外に、別に隠れたる人格が生れ出るこゝになります。然る時は、普通の人格を第一人格 P_1 と名づけ、潜在觀念よりなる人格を第二人格 P_2 と名づけます。第二人格は第一人格に油断があらば、其の肉を奪ひ取つて、自分のものにしてしうこ狙つて居ります。更にM N O P Q等の潜在觀念が團結して、第三人格 P_3 を作ることがあります。斯くの如くしてこゝに所謂人格分裂と言ふ變態現象が現れて來ます。此の如く分裂した人格と人格との關係交渉は却々複雑なもので、之れを精密にお話すれば、随分面白いのでありますけれども、時間が足りませぬから充分お話することが出來ませぬ。第一人格 P_1 は全身の筋肉を悉く自分のものにしてしうこする。然るに第二人格 P_2 は P_1 の所有する筋肉を奪つて自分のものにしてしうこす

る。 P_1 と P_2 との間に筋肉の奪合ひの戦争が起るのであります。そこで此の第二人格が如何なる方法によつて、第一人格の領分を襲ふかといふに、それには色々あります。其のうちの一例として、死神の現象を述べませう。

私の知つてゐる人で、岐阜縣の者ですが、深見しまこ云ふ女があります。十五六年前、大阪へ來て、或る人の許に奉公して居りました。此の婦人は何か世の中に悲觀するこゝがあつて、死にたいこの考へを持つて居たのであります。或る日、木津川に飛び込んで死んだらよからうか、さうして死んだ方がよからうかと思ひ悩んで居た時、丁度傍らに大きな西洋鉄がありました。彼女は其の鉄で以て喉頭部を突いて死んだらよからうかと思つて、死にかけたのであります。所がその主人が之を見つけて、直ぐに鉄を奪ひこつたのであります。此の主人は催眠術の上手な人でありましたから、彼女

に催眠術をかけ、そして「お前は死ぬと云ふ心はなくなつてしまふ。」と暗示を與へたのです。かくて目を覺まさせるに、彼女の精神は、ボンヤリして、自殺したいと云ふ考へはなくなつたのでありました。一寸見るに、これで精神治療は成就したやうであります。實は左様ではなかつたのであります。制止された自殺観念はさうなつたか云ふに、彼女の人格の區域から姿を隠くして潜在域に入り、潜在観念となつてしまひました。かう云ふ事はヒステリー患者には澤山あります。ヒステリー患者の人格の範圍は何時も固定して居りませぬ。廣くなつたり、狭くなつたりします。廣くなる時には從來の潜在観念まで人格の中に這入つて來ます。狭くなるに之れまで人格の中にあつた観念が、人格から離れて潜在観念となつてしまひます。さう云ふ具合で、人格を構成してゐる観念の數に云ふものは、固定して居り

ませぬ。殖えたり、減つたり、色々であります。先づ感情が激動するに人格の観念が少くなり、落付いて來るに人格の観念の仲間が殖えて來ます。感情が激昂するに、人格中の観念の或る部分だけが活動して、其他の観念は一時人格の外に姿を隠してしまふ。さう云ふ譯で、人格の観念に云ふものは何時も同じものではない。ヒステリー患者に於て殊に甚しいのであります。此のおしまふ云ふ女もさうでありました。人格の中にあつた自殺観念は、催眠術で抑へられて、其の姿は人格の中から消えて、其の外に隠れたのであります。然しそれが人格の外に隠れながらも、此の人格に油斷があつたならば飽迄も自己實現して、自殺を實行しように機會を狙つて居つたのであります。即ち死神になりました。そして、此の死神は人格を誘つて、自殺を實行させようとして、色々の芝居をして見せたのであります。それは第

一人格の網膜を刺戟して種々の活動寫眞を見せ、そして不知不識の間に自殺を行はせようとしたのであります。夏の或る日、おしまさんが二階で晝寢をして居りました。するゝ誰か知らぬが「おしまさんく〜」。と言つて、揺り起すものがある。目を覺まして見るゝ、嘗て見たことのない怪しい婦人が枕頭に立つて居る。看護婦のやうな衣物を着た美しい婦人でありませう。「おしまさん、こんな所に何時までも居るよりも、もつゝよい所へ連れて行つてあげませう。」と云つて、彼女の手をこつて引張るのです。おしまさんは行きたくはないから抵抗するけれども敵はない。トウ〜梯子段の降り口の所まで引曳られた。其の時大きな聲で「誰れか来て下さい。」と叫んだのです。するゝ主人公が急いで来るゝ、怪しき女は煙草の煙のやうに無くなつたのであります。それから五六日経つて、おしまさんが玄關にゐるゝ、

例の怪しい婦人が門前に来て手招きするから、何の氣もなく外へ出て見るゝ、其の婦人が見えないのであります。そんなところが二三回ありました。最後に彼女が夕方湯屋に行つて、手拭ゝ石鹸ゝを持ち、家へ歸る途中で、ピツタリと怪しげなる婦人に出喰はしたのであります。其の時に怪美人が一生懸命、おしまさんを説きつけました。「おしまさん、私は貴方と一緒に、何處かへ往かう〜、と勧めるが、あなたは私の云ふことを聞いて呉れませぬ、今日こそは私の行く所に行つて下さい。」と言つて執拗に勧めてきかない。彼女はマグネットに引きつけられた鐵片のやうに、知らず識らず其の婦人にひきつけられて歩いて行つたのであります。或る所まで行つて足の下を俯いて見るゝ、其處は深い〜谷間です。大阪附近にそんな所はないのですが、彼女はもうそんな事を考へ得る餘裕はない。谷底には百花爛漫と

して咲き亂れ、其處には自分と同じ位な少女達が面白さうに遊んでゐる。怪婦人は「おしまさん、私と一緒にあの谷間へ降りませう。」と言つて、彼女の手をこつて其の谷間へ降りようとしたのであります。其の時、彼女が何心なく不圖目瞬きします。谷間を思つて見て居りました所が木津川であつたのであります。危く木津川へ飛び込む所でありました。驚いて横を見れば、怪美人はもう居なくなつてゐました。彼女は非常に恐れを感じて、直ぐ様家へ歸つて、其の後暫らくの間は外出をしなかつたのであります。そしてそれ切り怪美人は來なくなつたのであります。この怪美人は死神の仕業で現はれた幻影であります。死神は彼女を誘つて自殺せんがために、怪美人や百花爛漫を咲き競ふ谷間や、少女の群なごの活動映畫を見せ、美しい谷間に遊びに行くのだと云ふ心持を彼女に起させ、自分の生命を亡

くするに云ふことを思はせないやうな方法で、おしまさんを自殺させようとしたのであります。

死神が人を欺いて自殺させるのには、斯う云ふ方法をこるものです。だから、死神に憑かれた人は、死ぬに云ふ心を以つて死ぬのではない。美しい所に行くのであると云ふ考へで行くのであります。其の結果は死になるのであります。大抵はさうです。潜在觀念は第一人格の要求に合ふやうに、イロ／＼芝居をやつて、自殺させるのであります。例へばお金のほしいやうな人であつたならば、川の中に金銀財寶が無量に落ちてゐるやうに見える。隠れてゐる觀念が、金を欲しがる人には幻覺で金を見せるのです。するに、彼は其の金を拾ひに行つて、溺れ死んで了ひます。女を好きな人には、川の中に裸體美人が泳いで居る所を見せます。音樂の好きなものには

水底から音楽を聞かせます。ライン河のあのローレライ云ふのは恐らく死神でせう。そう云ふ具合に、昔から人を殺すために誘ふ觀念は、第一人格の要求に應ずるやうにして死に導くのです。又、第二人格が第一人格の宗教的修行を妨げんが爲め、美人の姿を現はして誘ふたり、惡魔の姿を現はして脅したりするこゝもありません。

日蓮宗の僧に日久上人云ふ人があります。之れは下總の中山法華寺の境内に遠壽院云ふお寺がありますが、此の遠壽院の三代目の御住職であります。遠壽院云ふのは、日蓮宗の方の御祈禱の本山とも云ふべき所で、年々寒中には五十人六十人の祈禱僧が彼處へ修行に行つて、寒中單衣物一枚で、そして頭から水を浴び、僅かの御飯を食べ、一生懸命に法華經を讀んで修行して居ります。其の三代目の御住職が日久上人である。此の人は

祈禱の非常な名人であつたさうですが、此の人の力によつて、遠壽院は今日のやうに盛大になつた云ふこゝであります。日久上人には非常に面白い話があります。上人がさうかして、日本中の病人を、法華經の功力によつて治してやりたい云ふ心願を立て、千日の間、妙義山に立て籠つて修行をした云ふ話があります。九百九十九日云ふ、明日一日で満願云ふ日が來ました。一生懸命に法華經を讀んで、行をして居ります云ふ、日久上人の前に一人の白髮の老人が忽然と現はれました。其の老人が日久上人に向つて云ふには「お前は實に偉い、實に感心ぢや。お前の熱心には私も感心したから、お前に一つの術を授けてやる。」それはさうも有難い、然しさう云ふ術を授けて下さるのですか。「お前には隱身術云ふ術を授けてやらう。」隱身術とは即ち忍術です。邪道を行ふ爲めの惡魔の方法で、佛の正道を行

ふものには、要らない方法です。自分の身を隠して仕事をするに云ふやうなことは、さうせ碌なことではない。佛の力に依つて正々堂々病人を治す人には、隠身術に云ふやうなものは要らぬのであります。斯くの如き隠身術を、今の老人が日久上人に授けるに言つたのであります。するに日久上人は喝し怒つて言ひました。「貴様は怪しからぬ奴だ。私は佛の道によつて世の中の病氣さういふ悪魔を退治するのである。かう云ふ仕事をするに、隠身術に云ふ悪魔の術は、私の身にまつては無用のものである。さう云ふ悪魔の術を、私に授けるに云ふ貴様こそ、悪魔の變化したものであらう。」と云つて、手に持った木剣を投げつけたのであります。するに今迄、白髪の老人であつたものが、直ちに相好變じて大なる悪魔となり、「悔しい、俺は日本國中の病魔の王である。貴様は生意氣に、日本中の病氣を退治するに

言つて、俺の眷屬を亡ぼして仕舞ふ積りだな。明日は満願に云ふことであるが、俺の眷屬を助けてやりたいと思つて、お前に隠身術を授けてやるに云つたのだが、之れを受取つたなら、九百九十九日の行は水の泡に歸して了ふのだつた。お前が之れを受取つて呉れないのは残念である。」恐ろしい顔をして、其の儘姿は無くなつたのであります。そして、日久上人は目出度千日の行を終つたのであります。此の悪魔は何物でせうか。それは日久上人の心中に潜在する悪觀念の仕業であります。日久上人は段々修行を積んで、心を練りに練つて明日一日で全精神悉く佛の道に適つた清淨潔白なものにならうとする時期に接して居るのであります。日久上人の心の底に隠れ居る無始以來の悪念が、今や撲滅されんとする斷末魔に近付いて居るのであります。悪念たるもの奮起せざるを得ないのであります。そこ

で悪念は日久上人を誘惑して、九百九十九日の修行の功德を水泡に歸せしめやうと企てました。即ち白髪の老人となりて現はれ、隱身術を授けると言つて、日久上人を誘惑しにかゝつたのであります。若し日久上人にして其の計略に乗せられて、隱身術を受取る言つたなら、九百九十九日の修行の功德は滅亡する所でありました。凡て悪念は斯る方法によりて修行者を誘惑するのであります。釋尊が大悟徹底せんとする際にも悪魔が出たこと云ふことでもあります。斯ることを實際に悪魔があつたことして解釋するのは間違ひであると思ふ。釋迦牟尼佛が愈々悟りを開かんとする刹那に悪念が其の生命を奪はれんとするを怖れて、如來の修行成就を妨害せんが爲めに、悪魔の姿を現はしたのであります。詰り此の悪魔云ふのは、人格の外に潜在してゐる所の悪念の働きであります。すべて劍道の修行をや

つても、坐禪の修行をやつても、其他如何なる修行にありても、精神が最後の美しい境に入らんとする時には、大抵悪魔の妨害があるに決まつて居ります。其の時、修行者は悪魔を殺して佛になるか、悪魔に敗けて凡夫になるかの最後の戦いがある。それは人格に潜在して居る第二人格との喧嘩なのであります。

所が又、守護神云ふのがあります。此の守護神云ふのは、第一人格の利益になるやうに活動する第二人格であります。但し守護神と言へば大變立派な第二人格のやうであるけれど、大抵は下品なもので、矢張悪魔の一種であります。第一人格に都合がよいこと云ふだけで、世間普通の道德から見れば悪魔です。守護神を持つてゐる人は、餘り良い人でないのであります。只ソクラテスが想ひ悩んで居る時、耳元でさゝやいて助けるものがあ

つたミ言はれますが、あれは良い方の守護神であります。然し大抵はソクラテスのやうには行かないで、多くは悪魔です。私の研究した例には色々ありますが、其の中に千里眼問題に關係して斯う云ふのがあります。それは私の研究した一人の千里眼婦人であります。此の婦人は自ら天狗ミ稱する第二人格を持つて居りました。此の第二人格が現はれるミ、婦人の人相まで變つて、態度も横柄になり、人を呼捨てにするのです。此の第一人格の千里眼婦人は、非常に負け惜みが強くて、自分の出来ないミでも出来ないミは云はず、何でも出来るミ云ふのです。例へば乾板を箱に入れて彼女に差出し、「さあ、此の封じてある乾板に手を觸れずして念寫が出来ますか。」ミ問ふミします。するミ彼女の女は實際に於ては、實驗物に手を觸れずして念寫は出来ぬにも拘らず、それを正直に「出来ぬ。」ミは言はずして、「出来

る。」ミ云ふのであります。長尾夫人は實驗物に手を觸れずして念寫が出来たから、それに負けてはならぬミ云ふ負け惜みから、こんなことを言つたのであります。手を觸れなければ念寫が出来ないミ正直に云へば、私共はそれに相應する方法で實驗するけれども、手を觸れなくミも出来るミ云ふから、其積りで實驗するミ、彼女は何ミか彼ミか口實を設けて、矢張り手を觸れるのです。斯んな塩梅で、彼女は念寫が出来たけれども、實驗方法に於ては面白くない事がありました。負け惜みの心から、自分の弱點を何ミか彼ミか云つて誤魔化さうミしたのです。そこで私は二三の學者ミ相談して誤魔化すミの出来ない方法を案出し、「かくく」の方法で實驗しますが宜しいか。」ミ問へば、彼女は「學者の要求に満足を與へるやうに實驗が出来ます。」ミ、平氣らしく返辭したのであります。そして其のあとで、他人が居ら

ぬ時、天狗様が現はれ、私に向つて、「あんな、私の云ふことを聞いて呉れぬか、此の女性は學者の前で、貴方の注文通りにするに云つただけ、それは表面だけ、さう見せておいて、實はかうく、云ふ具合にして貰ひたいものだ。」と言つて、天狗様が彼女をして實驗物に手を觸れさせるやうに、講和談判を申込んだのであります。そこで私は「それはいかぬ。貴方は天狗様で偉いかも知らぬが、こんな學術上の問題を、貴方が彼是に云はれては困る。學問上必要だから、私の言つた通りにせなければならぬのであります。」と言つて、天狗様の講和談判を拒絶しました。そこで天狗様は退き、婦人は宅へ歸つたのです。私は此の天狗様が肘鐵砲を強く食はされて歸つたけれども、何か問題を起して復讐するであらうと思つて居りました。果して暫らく経つと、千里眼夫人の女中が走つて来て、「奥さんが大變熱を出しました。」と告

げました。私はその時、やつて來たなと思ひました。私は此の婦人に向つて常に、「あなたは大切な身體ですから病氣にならぬ様に注意して下さい。」と言つて、其の病氣になることを大變に心配して居りました。天狗様は私の心を能く知つて居たものだから故意に婦人に大熱を發せしめて、私に心配させるやうにしたのであります。私は檢溫器を持つて行き、婦人の體溫を計つて見るに、水銀は四十三度の度盛りの絶頂まで昇り詰めるのであります。度盛が多ければ、水銀柱がもつと昇つたかも知れませんが、暫く様子を見てゐるに、婦人の人相が變つて天狗が現はれた。さうして私の方を見てゐるに、一寸耳を貸してくれ。あのナ、此の婦人に熱が出るに、貴方は困るぢやろ。先刻の事は私の言ふ通りにしてくれ。私の言ふ通りにして呉れば、此の熱はすぐに下けてやる。先刻の事を聞いて呉れるのか、呉れないの

か。」と斯う云ふのです。私は千里眼の方は兎に角、天狗の働きによつて、果して熱が俄かに下るものなら、それを見て置きたいと思つて、「宜しい、あなたの言ふ通りに致しませう。其の代り二分間の間に、此の熱を平熱に下げなさい。さうすれば貴方の言ふ通りにしませう。」と約束しました。無論、實驗方法を天狗の云ふ通りにする氣はなかつたのですが、熱の下降を實驗して見たいので、斯様に申しましたのです。斯様に約束してから二分間を経て、検温器で熱を計つて見るに、普通の熱に下つて居たのです。精神の働きに依つて、熱が上つたり、下がつたりするこゝが實驗されました。斯んな具合に、守護神と云ふものは、第一人格の利益を計る爲めに、虚言を吐いたり、詐術を行ふこゝを平氣でやるのであります。だから守護神の名に欺かれて油断してゐるに、第一人格の利益を計るために、世間の人の迷惑を構はず、種

々のこゝをするのであります。

第三章 精神統一と能力

一、觀念のテレオロジー

どんな觀念でも、肉の上に自己實現するに云ふことが其のテレオロジーであります。それで肉を離れて、觀念ばかり統一することは出来ない。精神統一とは單に觀念と觀念の統一に云ふのではなく、觀念と肉との關係の統一を意味するのであります。故に精神の統一は即ち身體の統一、身體の統一は即ち精神の統一であります。筋肉の統一を離れて、精神を統一するに云ふのは嘘であります。

それで精神が僅かに亂れても、その結果は肉の上に現はれるに極まつて

居る。どんなに微弱な觀念でも、それは必ず肉の上に自己實現して来る。一念微動すれば、それは必ず肉の上に何等か働きをするに極まつて居ります。玉突の名人と名人同士が勝負をする時、一方の名人が家を出るにきに、女中に小言一つ云つても、其のこゝが雜念となり、そして其の雜念は肉の上に働いて、其日の玉突には敗けるに云ふことでもあります。一寸女中に小言を言つたのでも、其の雜念が肉の上に働きかけて玉突の腕に影響します。觀念の働きは怖るべきものであります。武士道に於ては、これを魔が差すに云つて非常に戒めたものであります。魔の差すに云ふのは、心理學的に言へば、潜在觀念が人格の隙に乗じて、筋肉の統一活動を亂すことでもあります。日蓮宗ではこれを罪障と名づけて居ります。前に述べました日久上人の場合でも、釋尊の場合でも、人格の外に隠れて居る雜念が、惡魔の姿を現

じて、成等正覺の修行を邪魔しようとしたのであります。かう云ふ具合に人間の精神中に潜在する雑念は、自己の要求を果さんがために、あらゆる一切のドラマを演じて、人格の統一を亂さんとするのであります。此の雑念が武士道の所謂魔であります。武士道の方では、一寸でも雑念があるミ、それが必ず真劍勝負の時に影響するミ云つて、一生懸命にこの雑念を取り拂ふやうに工夫します。山岡鐵舟先生は有名な一刀流の先生でありましたが、あの人が淺利又七郎義明ミ立合つた時の話が却々面白い。それは山岡鐵舟先生の隨筆の中に書いてありますが、鐵舟先生は色々の人ミ試合をした。然しさうも是はミ思ふ程の人には出會はない。終に將軍家の指南番淺利又七郎義明ミ立合つて見たが、這がの鐵舟先生も淺利先生には一本やられたのである。残念である、さうかして、淺利先生に打勝つて見たいミ一

生懸命になつて居たのであります。山岡先生は座禪をやつた人でありましたから、暇さへあるミ結跏趺坐して、無字を心頭に掛けて、雑念一掃に努めたのであります。凡ゆる一切の雑念を拂ひ去つて、止水明鏡の境地に住すのであります。さう云ふやうに毎日やつてゐる間に、精神が餘程落ついたミ思ふミき、山岡先生は木刀を持つて、淺利先生に向ふ姿勢を取つて見る。さうするミ木刀の先には、淺利先生の姿が現はれて来る。恰も大盤石に向ふが如くで、さうしても攻撃して行く勇氣が出ない。斯様に淺利先生の幻が見えるやうなミこころでは、また、俺の精神中に雑念があるのである。これでは駄目であるミ思つて、又一生懸命に修養した。まア是位ならば宜からうミ思つて、木刀を持つて立つて見るミ、淺利先生の姿が忽然ミ現はれる。こんな事ではいかぬ。ミ更に一生懸命に修業して居りました。山岡先生の斯

の如き苦心修養は數年に亙つたが、或る時、例の如く座禪をしてゐるに、一切の雜念は一掃され、眞に天地物無きの境地に到る事が出来ました。試みに木刀を取つて淺利先生に向ふ姿勢を擬したるに、天空海濶、一塵の眼を遮る物がないのであります。そこで淺利先生と立合ひたるに、淺利先生は中途で木刀を投げ捨て、「今日の貴殿は曩きの山岡鐵舟とは全然違ふ。今日の貴殿の太刀先にはもう敵對するこゝが出来ない。貴殿は一刀流の極意に徹したのである。」と言つて、一刀流の極意皆傳を與へたと言ふこゝであります。詰り淺利先生と云ふ人は怖ろしい人であると言ふ、僅かの念が鐵舟先生の頭にあるがために、全身の筋肉の活動が束縛されて、斬り込むこゝが出来ぬのであります。

又、是は東京の本所のキセン院と云ふ祈禱僧の話であります。勝海舟先

生の隨筆の中に書いてあるのですが、先生がまだ青年時代のこゝ、其の當時、本所にキセン院と云ふ祈禱の名僧がありました。その御祈禱がよく利くと云ふので、大に繁昌したが、後には流行らなくなつて、大層貧乏したのであります。其のキセン院が或る時、勝先生に向つて、斯様な物語をいたしました。貴方は普通の若い者と違つて見所がある。私の經驗談を話すから聞いて覚えて置いて下さい。私は今こそ見窄らしいものであります。是でも一時は本所のキセン院と云へば、江戸八百八町に御祈禱の名が高かつたものです。それが後に何故流行らなくなつたか。その事に就いて實驗談があるから聞いて置いて貰ひたい。御祈禱をするには大變に身體が疲れる。それだから私は滋養物を攝る。殊にスツポンの生血を吸ふ。是が私の養生法である。或る時、子供がスツボンに繩をつけて引張つてゐるから、

それを買つて持ち帰り、小僧達にそれを殺すやうに命じたのです。暫らくするに小僧達がやつて来て、殺すところは出来ませぬ。スツボン奴が恐ろしい目をして睨むので、怖くて殺すところが出来ませぬと云ふから、わたしが何のスツボン一疋位に、そんな意氣地のないところでござうなるものかと言つて、自分が出刃庖丁を取つて向つて見るに、スツボン奴が怖い目をして、わたしを睨んだのです。大分に氣持が悪かつたけれども、小僧達の手前もあるから、スツボンを殺して生血を飲んだのであります。それはそれでよかつたのであります。其の後のことでもあります。何時も木劍に珠数を爪繰つて、一生懸命に御祈禱をやります。所謂御祈禱三昧で一心不亂に御祈禱をやらなければなりません。一生懸命御祈禱をやつて居つて、もう是から段々精神統一して加持三昧に入らうとするに、嘗て殺したスツボンの顔がス

ツツミそこへ現はれて来る。其の刹那、三昧が破れる。是ではならぬ。一生懸命にやつて居るに、スツボンの幻が現はれて来る。一生懸命になつても、其のスツボンの厭らしい顔が目に見えて、加持三昧が破られてならない。それから御祈禱の功力が無くなつて、流行せぬやうになつたと云ふことを勝先生に言つたことがあります。スツボンに睨まれる如き事は、ホンの僅かな小さい經驗でありますけれども、其の經驗は太平無事なときには、何等の妨害にはならぬ、何の悪戯をするものでもありませんが、愈々眞劍の仕事をしようとする大切な場合に、それが種々の現象を起して妨害をするものであります。斯のやうに雑念と云ふものが人間の活動に妨害をするに言ふところは、眞劍に修養し一生懸命に仕事をして見た人でなければ理解出来ないであります。武士道の如く眞劍勝負なことで心を磨くやうな、

あゝ云ふ眞劍の修行をやつた人でなければ、一念微動の雑念が、どれ程仕事に妨害するか云ふことは分らぬのであります。今日の人は斯う云ふ話をして、あまり興味を持ちませぬ。それはさう云ふことを理解し得るだけの修行が足りないのであります。今日の人は仕事に眞劍味を持たない。其の心には始終雑念のあり通しです。だから少し位雑念が殖えても滅つても同じことである。だから、今日の人は些細の雑念が筋肉の活動に妨害するといふことを理解し得ないのであります。

二、精神統一の意義

精神統一とは、あらゆる一切の觀念が、一の目的實現に向つて共同一致して活動する状態を云ふのであります。此の活動は無念無想と一念堅持との二段から成ります。

無念無想とは、あらゆる一切の雑念を一掃して、心を明鏡止水の如くすることです。然し雑念を一掃するに云ふのは、單なる精神の問題ではない。肉の問題であります。雑念を一掃するに云ふことは、詰り身體を構成する數百萬億の細胞が、自分々の勝手な心を持たずして、人格から命令がありさへすれば、いつでもそれに向つて一致活動し得るやうに、無念無想の境涯となつて居ることです。斯く無念無想の心的状態にありて、目的觀念を固く持して動かぬのが一念堅持であります。無念無想の時に、一定の目的觀念が強く現はれて来るに、全身數百萬億の細胞が目的觀念の實現に向つて共同一致の活動をします。これが精神統一であります。

熊本の星野九門に云ふ柔術の先生が私に話したことがあります。名人

は指の先きで物を押へる。云ふけれども、あれは指の先きだけではない。全身の力が指の先きに籠つて居るのである。云ふことを、私に話して呉れました。指の先きに全身数百万億の細胞が力を合して働くから、タツター一本の指の先で押へた所に大盤石の力がある。さう云ふ具合に、あらゆる一切の雑念を拂ひ去つて、無念無想の境涯になつて、そして全身の筋肉が舉つて一つの目的に向つて活動するのが身體の統一であります。

雑念が取れてしまふ。目がハッキリしてくる。それから瞬きが無くなつて來ます。昔支那に弓の名人があつて、その人の所へ弟子入りした人がある。弟子が「私は先生のやうな弓の名人になりたい。」と言つた所が、師匠が「宜しい。然し俺のやうになるには只普通では出來ない。先づお前は瞬きをしない稽古をして來い。」かう云つたのです。そこで弟子が家へ歸つ

て、何でも機械りする機械の上がつたり下がつたりする棒があるさうです。が、其の下の所に仰向けになつて、一生懸命それを見詰めて、瞬きをしない稽古をしたのです。熱心は恐ろしいもので、数十日経つと、全く瞬きをせないやうになつた。そこで「此通り、瞬きをせないやうになりました。」と先生に言つて出たのです。所が先生は「今度は小さい物を大きく見るやうになつて來い。名人になりたければ、小さい物を大きく見るやうになつて來い。」と云はれて、弟子は家へ歸つて、虱といふ動物がある。あれを女の髪の毛筋に結んで、窓の所へ下げ、一生懸命に見て居つたのであります。熱心は恐ろしいもので、「虱が大きく見えて來ました。其の大きさ車輪の如く、其他の物を見るときは、丘山の如し。」とあるから大したものでもあります。尤も支那一流の多少の法螺もありませう。此の大きく見える。云ふことは、結局精

神問題であります。虱は客觀的に見れば、矢張り小さい物であるけれども、其の物を大きく見るか、小さく見るか云ふことは、精神が落ついて、無念無想になつてゐるか、雑念に満されて居るか云ふ問題であります。充分精神が落ついて無念無想になれば、ほんの僅かの時間が大變長くなりて、僅に一セコンドの間に、普通人の二分も三分も掛つてやるやうな仕事をやります。だから精神の充分落着いた人は、自分ではゆつくりやつて居る仕事でも、傍の普通人から見ると、眼にしまらぬ程早いのであります。日比野雷風云ふ居合拔きの先生は、根本通明先生から貰つた中身四尺もある刀を腰に差し、それを五寸程しか抜くここの出来ないやうに両手を縛つて、エーツと氣合をかけて刀を抜きます。如何様にして抜くのやら、更に眼にしまらぬが、兎に角刀が鞘の外にあるから抜けたと言つて宜しい。然し眼には見

えぬが、それを抜く方法丈は解つて居ります。初め少しばかり手で抜いて、後は腰を後方に引いて抜くのであります。腰を後方に引く時には手から柄をはなし、抜けてから又之を握るのであります。然しそれが餘り早いので、吾人の眼には如何にして抜くか解らぬのであります。斯様に、精神の統一によりて、我々の目ではさうしても見るここの出来ない程迅速に身體が動くので、然し精神を統一して見れば、亦それが見える様になるのであります。手の早業も精神の統一で出来るし、又そんなに早いものでも、精神の統一によつて、それを見るここの出来る。

精神が統一した時には、全身の筋肉が悉く自由に使用されるやうになります。然し私共は精神を完全に統一し得ないから、身體の全筋肉を自由に使ふことはないと思ひます。長い生活の中には、こもすれば、そんな事があ

るかも知れませぬが、何時でもあることは思はれません。例へば私共が講演をするのでも、所謂油が乗るに云ふ時には、比較的に全身の筋肉が統一して言葉の運動を助けるので、辯舌が圓轉滑脱になります。私共は百回講演をやりましても、本當に完全に油の乗つたものは一回有るか無いか位のものであります。都合好く油が乗つてくるに、言葉が非常に流暢明瞭になり、聲も朗かになつて來ます。特に聲に云ふものは人格の現はれて、精神の統一、身體統一の結果、不思議な變化をいたし、一種の魅力を持つ様になります。私の知人で眞言宗の僧侶がありますが、今は六十歳を超えて居ります。其の人が私に告白したところがあります。恥かしいことであるが、私は六十年近く斯うやつて、佛様の前で御經を上げて居るが、一度も自分を忘れ佛様と一致の心持になりて御經をあけたところがない。御經を上げながら雑念を

浮べ居るので、讀經三昧になることが出來ません。けれどもタツタ一度だけ、是はと思ふ經驗があつた。それは或る老人夫婦が私の寺へやつて來て、其の娘が亡くなつてから百ヶ日目に當りますから、御經をあけて下さいと言つて頼んだのです。其の時に、老夫婦は自分の後ろに坐を占めて、自分は佛様の前に結跏趺坐し、理趣經を上げたのであります。不思議にその時は、自分自身を超越して全く佛様と自分が一致したやうな心持で實に云ふべからざる氣分で、理趣經一卷を讀むことが出來ました。濟んでから後ろを振返つて見るに、老人夫婦がハラ／＼と涙を流してゐる。今日の御經を貴方がたはさう云ふ具合に聞きましたか、聽くに、老人夫婦の言ふには、實に今日こそは本當に私の娘が成佛したに相違ないと感じましたので、斯様に涙が出ました」と云ふ答をしたに云ふ話であります。これは確かに和尚

さんが佛と一致し、無我の境涯に於て、全身悉く讀經に向つて統一した結果だらうと思ひます。擧身說法と云ふことがありますが、良い言葉だと思ひます。說法と云ふものは單に口丈で說法してはいけない。數百萬億の細胞が悉く一致して說法してゐるのでなければ、擧身說法だとは云はれないのであります。さうするに、其の聲に、其の調子に、其の態度に、一種言ふべからざる魅力と權威とが現はれて、聽者の全精神を惹き付けて了ひます。今の眞言宗の坊さんの御經もそれで、口先でのみ御經を讀んでゐるのではない。全身の細胞悉く御經を讀んでゐるのである。其の結果、老人夫婦の心の奥に滲込む所の一種不可思議な有難味を現はして來たのであります。だから讀經と云ふものは精神統一してやれば有難い筈である。有難くないと云ふのは、それは讀み手の心が亂れて居るからだと思ひます。だから

人間の聲は其の魂を現はします。どんなに能辯でうまいこと喋べつても、唯それだけでは聽衆に感動を與へることが出來ないのであります。只面白かつた可笑しかつたこと云ふだけで終るのであります。本當に精神統一して全身悉く話をする時には、其の云ふ所の言葉の意味が、聽衆に理智的に理解されなくとも、其の刹那、聽衆は分らぬながら、其の分らぬ間に一種の魂の靈動を感得するやうになります。だから眞の說法は聽者の單なる理智に訴へるものでなくて、直接に其の魂に訴へるものであります。それには精神統一して說法しなくてはなりません。說法者が精神統一して說法すれば、其の聲や調子が聽者の魂を引き込んで、説者と同様の精神統一に導きます。即ち説者と聽者が同一の精神状態になります。所謂魂の共鳴と云ふか感應道交と申す關係が出來ます。精神統一した説者の聲が、聽者の精神

を自分と同一の統一に引き入れると言ふことは、最も重大なる心理的事實であります。又音楽でもさうです。音楽に云ふものを只耳で聞いてゐる間は面白いと云ふだけでありませう。モザルトやワグネルなき言ふやうな天才は、單に面白い音楽を作つたに云ふだけではない。或る神祕的實感、それを音楽に現はして居るのであります。ワグネルの如きは、始めには世間一般の人の氣受けに合ふやうに、世間の人の喜ぶやうに、作曲したものであります。けれども彼は中頃から考へた。「俺は藝者にあらず、幫間にあらず、俺は藝術家である。藝術家に云ふものは、世間一般の俗情を迎へて音楽を作るものではない。俺は藝術家として自分の靈感そのものを赤裸々に音楽に依つて、言はせなければならぬ。」斯う考へてから、彼は決して世間の俗情に迎合するやうなものを作らず、自分の靈感を無遠慮に音楽に現はし

たのであります。其の結果、世間の人は、ワグネルを狂人であると思ひました。漸く五十二歳にして一部の共鳴者を得ました。そして彼が死んでから四十年程経つた今日、歌劇改造の神様は云はれる程、音楽の方の恩人になつて居ります。さう云ふやうに、一種の靈感を直ちに音楽に物言はせる時には、それを聞く我々が單に耳丈で聞いたならば、靈感に觸れることは出來ない。全身の細胞が統一して聞く時、吾人の魂は大音楽家の魂と一致し、其の神祕的靈感に觸れることが出來ます。だから神祕的靈感の音楽は單に耳を以て聽くべきものでなく、數百萬億の細胞悉くを以て聽くべきであると思ひます。

三、能力の爲の精神統一

次ぎに精神統一は、能力主義の精神統一、安心主義の精神統一の二つに分つこゝが出来ます。能力主義の統一を云ふのは、或る一つの仕事をなさきに、其の仕事が完全にするための精神統一であります。武士道に於ける剣道の極意の如きが、其の好適例であります。相手を撃つまきに撃たうと思つて然る後撃つやうでは不可なものです。心と身體と一緒になつて撃つと思ふそのまゝ打つのである。撃つと思ふこゝと、撃つこゝの間には、毛筋一本程の距りもない。觀念の活動と身體の活動が、ピッタリ合ふて居る譯なんです。又相手を撃つのに、唯手丈で打つてはならぬ。全身を以て打たねばならぬ。即ち全身の細胞を統一して打たねばならぬ。それで、能力主義の精神統一の理想は、觀念の要求する通りに、身體を活動させるこゝであります。一體精神と身體との間にあつては、觀念の方では明瞭であり

まして、此の明瞭なる觀念を身體の上に其のまゝ現はすこゝが六ヶ敷いのであります。人格のテレオロジーは其處にあります。従つて、人格の修養は、其處を狙つて進み行くのであります。貴方がたは自分の親の顔、自分の奥さんの顔は能くハッキリ御存じの筈であります。けれども其の明瞭である觀念を繪に描いて御覽なさい。似ても似つかぬ飛んでもないものが出来きます。觀念の方では明瞭であるけれども、腕を通してそれを書かうとすれば、思つたのとは、丸で違つたものが出来きます。

或美人畫専門の畫家がありました。此の人が寫生するために、何處かへ行つて、大分に材料を集めて家へ歸りかけたのです。所が夕立が降り出したので、さある大きな路傍の樹の下に雨宿りして居りました。暫らくして雨が歇んだので歸らうとした時、其の傍の百姓の家の方で、高窓をカラツミ

開ける音がした。フト其の方を見るに、其處に十六七の娘が、高窓の格子の間からのぞいて、天の雲行を見てゐるのであります。大變その場面が氣に入つたので、畫家がこれを寫生しようと思つて、寫生し始めたけれども、ウツカリ手間きつてゐる間に、その女が引込んで困ると思つて、唯記憶に止めて歸らうと思ひぢつとそれを見詰めて居りました。女の姿、高窓の様子、着物の模様から、そこらあたりを能く見詰めて、腦裡に充分印象して家に歸りました。そして細君に言葉もかけずに、畫室に入つて、一生懸命それを書いたのです。そして出來上つた畫を見るに、腦裡に印象して來た娘も十分に似て居らぬ。娘の顔の様であつて、何處やら自分の細君にも似て居りました。半分程はその娘らしく、半分程は奥さんに似てゐる。詰りそれは畫家の心中にある娘の觀念が人格の中心となりて、畫布の上に自己實現をやり

つゝあるのであるが、それと同時に、人格の外に隠れて居る奥さんの顔に係する觀念が自己實現をやつたからであります。觀念は競争しますから人格の中心の娘の觀念に對抗して隠れて、居る細君の顔の觀念が畫家の腕を支配したのであります。其の結果、出來上つたものは、半分程奥さんに似て居つたのであります。かう云ふ譯で、人間の腕の筋肉は觀念の要求に完全に合致するやうにはなりません。貴方がたは自分の奥さんの顔、親の顔は充分に認識して居つても、それを筆の上書き現はすに、途方もない違つたものになるのは、斯る理由によるのであります。

けれども念寫で行くに、それが觀念の要求通りに出來ます。例へば或る一定の人の顔を數秒間見て置いて、それを念寫しますれば、實際の寫眞の様に、その人さ全く同じものが寫されるのであります。是れを以て見ても、人

間の記憶は完全無缺であることが解ります。僅かに數セコンド間見たものでも、其の經驗が實物通りに、觀念ミなつて精神中に把持されてゐるこれが解ります。けれど、それが腕を通して自己實現するミ、觀念そのもの、姿が正直に現はれないのであります。だから觀念は肉を通して自己實現するミ、其の結果は不完全である。然し、肉はさうしても觀念の姿を完全に實現し得ぬものミ運命的に決定して居るかミ言へば、決してさうではありません。肉は觀念の姿を完全に實現する可能性を具へて居ります。そして精神統一はそこを狙つて居るのであります。其の可能性は次の如き實例で解ります。

是は女子大學の生徒で、繪を書くことが上手であつたが、然し筆力が弱かつたのであります。さうかして筆力の強い繪を書いて見たい〜ミ、始終思ひ詰めて居つたのであります。所が或晩に夢を見ました。それは秦の豫讓が智伯の衣を裂く所を描いた繪を、夢にハッキリミ見たのです。さうして目覺めるや否や、飛び起きて筆紙を出し、夢に見た所を手本ミして一氣呵成に書いたのであります。出来上つた繪は、筆力雄健、逆も女の手ミは思へぬ程に立派なものであります。尙よく見るミ、それは全く北齋の畫其の物を見るやうであります。恐らくこれは彼女が嘗て北齋の描いた秦の豫讓を何處かで見ることがあつて、其の觀念が自己實現して、斯る繪ミなつたのでありませう。して見るミ人間は完全に觀念の要求を現はすべき腕を持つて居る筈であります。たゞ普通に於ては、肉の活動が觀念の要求通りに現はれて來ない。觀念そのものは明瞭であつても、腕がその通りにはならない。そこで精神統一の必要があります。精神統一は觀念の要求通

りに働き得るやうに、筋肉を統一させることである。小學校では生徒に手工細工をやらせますが、あれは非常に必要なことで、單に畫家にならうとか、大工左官にならうとか云ふ意味に於て必要なものではありませぬ。何も畫家、大工、左官にならなくとも、人間はその筋肉をして、觀念の要求通り、活動せしめるやうに教育せねばならぬのであります。貫名先生は弘法大師の書を眞似されたこと云ふことでもあります。貫名先生は弘法大師の書を手本を見てゐた。一日でも二日でも之をジーツと見詰めて居つたさうであります。そして愈々弘法大師の文字に對して精神が統一した状態になつた時に、手本を伏せ、手にまかせて書かれたのであります。そして其の書は弘法大師の書とすつかり一致したと云ふことでもあります。確かに書の名人だけあつて、普通の習字方法と異つて、本當の習字方法であること信じま

す。東京京橋區に白山松哉と云ふ蒔繪師が居ました。此の人は蒔繪について名人と云はれた人で、殊にその得意とするのは、茶壺に渦巻を描くことでありました。あの蓋から下まで渦巻を書くのが巧みであつたさうです。それは少しも定規なごを當てずにフリーハンドで書く。而もその渦巻が實に定規を當て、書いたやうに巧妙に行つたものださうです。其の人の云ふことが面白い。定規を以て眞直ぐな線を引くことはいかぬ。さのやうに定規を當て、眞直ぐに線を引いても、名人から見ると其の線には生命がない。眞直ぐと云ふ一念を籠めてスーッと引けば、其の線は假令少々歪んで居つても、名人が見れば、其の線の中には眞直ぐと云ふ精神が現はれてゐる。定規で以て眞直ぐに引いた線は、目で見ると眞直ぐであるが、其の線には生命がない。眞直ぐと云ふ精神を凝して引けば、少々曲つて居つ

ても、眞直ぐ云ふ感じが起つて来る云ふことでもあります。是れは尋常一様の人では言へぬことであると思ひます。此の人は一週間かゝつて拵へるものならば、一週間だけ暮しに必要な生活用品を奥さんに渡し、それから仕事にかゝる云ふことである。何故か云ふと、彼は仕事をしてゐるのに、米が高いとか、金が足らぬとか云ふことを聞かされる、精神が亂て仕事が出来ないからであります。それで、一切家庭の問題、經濟問題は、彼の耳に入れぬやうに、奥さんに言ひ渡してありました。又奥さんも名人につれ添つてゐる人ですから、米、薪炭、味噌などの高いとか安いとか云ふことを、主人に言はなかつたのであります。けれども、如何に口に言はなくとも、經濟不如意になる、眉、眉の間に八の字が出来る。する、矢張り白山先生の心を亂して仕事の邪魔になります。それで白山先生は一週間かゝつて仕

事をする時には、一週間の生活に要する米、味噌、薪炭などをすつかり奥さんに渡して、それから仕事にかゝるのであります。さうして其の間に、例へば櫻を描く云ふ場合なれば、櫻は誰れでも知つて居りますから、普通の知識で櫻を書いたら宜いように思ひますが、松哉先生はさうでない。上野、淺草、向島、櫻見に行く。さうして櫻を見てゐる間に、自分の精神、櫻が一つになつて来る。そこで初めて櫻の畫を書くのであります。さうすれば花の魂が、蒔繪の中に籠つてゐる云ふのであります。そして先生は、常に今の若いもの、腕の問題ならば違ふことではないが、若い者は俺のやうに凡ゆる一切のこゝを忘れて一心になる事が出来ない。俺にはそれが出来る。其の點だけは自慢だ云つて居られました。斯くするには、精神を無我一念にせなければなりません。無我一念とは、雜念を去つて、強き一念を持つこ

云ふのであります。無我になつたッけではいけない。無我だけでは精神中が空でありますから、その時にうつかりするこゝ、悪い邪念が襲ふて来るこゝがあります。さらば下手な坐禪をやつて居れば、仕舞には増上慢になつて、世の中に自分より偉らい者がないこゝ云ふやうになる。所謂禪病であります。だから精神を無我の境涯に導くのはよろしいが、正しき無我一念の一念を注ぎ込んで置かぬと碌でもないこゝになるのであります。

然しながら此の一念を持つこゝ云ふこゝが却々むつかしいのであります。精神統一の問題で、實行上一番むつかしいのは、無我一念の一念を堅く持つこゝです。無我になるのは大概の人はなし得ますが、一念を持つこゝが實にむつかしい。特に劍道は此の點を最も重大といたします。これは俗説であります。斯んな話があります。荒木又右衛門は本多大内記に仕へて、

劍道の師範役をして居りました。本多大内記が荒木又右衛門に向つて、眞劍白刃止と云ふこゝがあるさうだが、私にそれを傳へて呉れまいかと言つて頼みました。所が荒木は、貴方のやうな未熟の者に、眞劍白刃止を傳授するこゝ思ひもよらぬと言つて、キツパリ断りました。本多の殿様は立腹して、餘りと言へば剛慢無禮の又右衛門、何に言かして彼の油断せる所を打ち込んで、其の高慢の鼻を挫いてやらうと思つて居りました。天守閣の一番上で、殿様と荒木と唯二人で酒盛りをして、逃げるこゝの出来ぬやうに梯子を取つて置き、荒木が十分酔拂つた時を見計つて、本多大内記が鎗を以て荒木に向つたさうです。荒木は酒に酔つて居るけれども、さすがは名人、突いて来る鎗を引つたくつて、今度はそれを構へて殿様の方へ向つたのです。さあ大變なこゝになつた。梯子段は取られてゐるから逃げるこゝは出来

ない。トウ／＼天守閣の坐敷の隅の方へ追ひ詰められて、砂糖の塊りを火の端に置いたやうに、小さく堅く丸くなつて居つたのです。又右衛門は鎗を以て、犇々こ詰め寄りました。實に危険な所です。本多大内記もいふ是れまでこ覺悟を定め、又右衛門の突き出す鎗先をヤットこ言つて、兩手で挟んださうです。又右衛門が押しても、引張つても、ごうしても手から離すこゝが出来ない。其の時、荒木が殿様に向つて、夫れが眞劍白刃止でございませぬ。之は生死の岸頭に立つた刹那に、一念の徹底した結果であります。眞理を獲得するものは、大膽不敵でなければならぬ。疊の上に安閑として居つて得られるものではない。虎穴に入らざれば虎兒を得ず、臆病者は永久に神を見ず。眞理は活物です。その活物を得ようとするには、虎穴に入つて虎の兒を奪ひ取るやうに、我々は生命を云ふ

ものを無視し、さうして大膽不敵に、思ひ切つた仕事をせなければなりません。丁度、宮本武藏が十三歳の時に、劍道の極意を得たと同じであります。宮本武藏は播州の或叔父さんのお寺に居候して居る時、丁度十三歳で幼名辨之助と申しました。寺小屋へ通ふて習字の稽古をして居ります。其のとき、有馬喜兵衛と云ふ新當流の達人が播州へ來まして、其處の濱邊に矢來を結び、眞劍勝負望みの者は誰れでも來い、望みに應ずる。」といふ立派な札を立てたのであります。宮本辨之助は寺小屋から歸りがけに、この高札を見て、手習筆で「望みの通り眞劍勝負に應ず。宮本辨之助」を墨黒々こ書いて、さうして知らぬ顔をして叔父の家に歸つた。するに有馬喜兵衛から使ひが來て、宮本辨之助と云ふものが居るそうだが、書くにも事を缺いて、高札の上には、ベタ／＼こ書いたのは、武士の面に泥を塗つたと同じである。早速眞

劍勝負をするから、明日定め場所まで来いよ云ふのである。驚いたのは和尚さんです。家の辨之助は劍術をやつたこゝにはないがこ思ひながら、ひたすら詫を入れた。辨之助はまだ子供で、悪戯心からそんなこゝを書いたのでせうから、さうぞ許して下さいとの意味で詫びたのです。有馬喜兵衛の方では、子供の悪戯ならよろしいが、お前も私との二人だけ許しても、世間の者から、あれ程の侮辱を受けながら、眞劍勝負が出来なかつたと言はれては、武士の面目がたゞぬ。明日、矢來を結んだ場所まで来て謝りなさい。さうすれば拙者の面目も立つ、辨之助の生命も助かるよ云ひます。それでは左様に願ひませうよ、其の次の日に、和尚さんが辨之助を定め場所連れに行つた。辨之助は腹の中で餘計なこゝをする叔父さんだこ思ひながら、寺の縁の下にあつた七尺ばかりの棒を持つて、勸進帳の辨慶見たいな格好

でドスン／＼と行つたのです。定め場所まで行くよ、竹の矢來の廻りには、見物人が黒山のやうに集つて居る。既に有馬喜兵衛は待つてゐます。和尚さんは、そこへ行つて、辨之助はまだ子供です、十三歳の鼻垂れ小僧ですから、あんな悪戯をしたので、實に何とも申譯がありませんよ謝つてゐる。所が宮本辨之助は「喜兵衛よは其方が、いざ勝負参らん。」と言つて出ましたから、講和談判は破裂で、それからチャン／＼とやつてゐる中に、トウ／＼有馬喜兵衛は、大腹這こなつて、辨之助に打殺されてしまつたのです。其の時に宮本辨之助は始めて眞劍勝負をやつたので、後に其の時の感じを述べて居ります。眞劍勝負の場合には、敵の胸元に、自分の頭がブツつかる程、飛び込んで行けば、其處に活路を得るのである。どんな人でも自分の生命が惜しいから、向ふに寄つたつもりでも、側から見ると離れてゐる。進んだつも

りでも離れてゐる。眞劍勝負の時は、自分の額が敵の胸元に向つて打突か
つて行くやうにやればよいのである。さう云ふ具合に、自分の生命を忘れ
て敵の懐ろに飛んで入れれば、必ず其處に一條の活路を開くこゝが出来ると
言ふこゝを感得したのであります。武藏は十三歳の時から六十回に餘る
眞劍勝負をやつて、何時も敗れたこゝがないと云ふのは、常に其の心持であ
つたからだと思ひます。自分の生命をスツカリ忘れて、只向ふに進んで行
くと云ふ一念が非常に強い。さう云ふこゝは理窟では得られない。只眞
劍勝負のやうな實驗に於て得られるこゝであります。

又一刀流の先生がこんなこゝを云ひました。眞劍勝負の場合に、相手の
打ち込む刀が頭に来て、もそれを受けてはならぬ。只相手を斬るこゝを
念を持つてば宜いのである。其の瞬間、相手から刀が来ても、それを受け

うな生温い心では眞劍勝負の役に立たない。もう自分の命は無いものこ
覺悟して、こちらの一念を果すこゝいふ心でなければならぬ。武士道の精神
はかう云ふ所にある。自分の命だけを安全な所に置いて、人ばかり殺さう
と云ふやうな、ケチな態度は武士道でない。自分の生命は敵に與へる。同
じ敵に生命を與へるならば、出来るだけ此の生命を高い値段で賣渡すこゝ
ふのが武士道の精神である。只自分の念じた仕事を、飽迄も貫徹するこゝ
ふ一念の外、何物もあつてはならぬ。これが武士道の骨髓で、無我一念の一
念を遺憾なく言ひ表はして居ります。斯様に此の一念を強く持つこゝが
出来るなれば、人間は偉大なものになります。それで能力主義の精神統一
と云ふものは、あらゆる一切の觀念による活動を休めて、盡天極地終始一貫
して渝らざる強い念を持つと云ふこゝであります。此の一念を持つこゝ

の強いものは必ず名人になります。利巧者は心が動くから名人になれない。愚直なものが反つて名人になると言ふは、此の點にあると思ひます。獨逸人などは寧ろ利巧な人間に云ふよりも愚直な人間で、飽までもやらうと思つたことを、始終一貫してやり切る國民である。佛蘭西人はごちらかご云ふご才子であります。うまい事を考へるけれども、徹底的に進まずして途中でやめて了ふ。今世界人類の驚異と言ふべき猶太人の如きは、徹頭徹尾愚直な民族であります。彼等は五千年の歴史を通じて、終始一貫して同一の神を拜み通し、其の信仰によりて、人類の受くべき最大の困難に遭遇しながら、それに打ち勝つて來た程の愚直者です。其の結果、アノ様な怖るべきものになりました。ベルグソンやアインシュタインの如き大膽な學說を唱へてゐる、世界最大の學者が猶太から出て居ります。世界に名高い

金持も猶太から出てゐる。最大な政治家も出てゐる。そして世界の此處彼處に散在して居る千四百餘萬人の猶太人は、共同一致して理想の國を開かんとして、着々進みつゝあるやうであります。そして彼等は世界の到る所に革命を起しつゝあります。猶太人の居る所革命あり、革命のある所猶太人ありと言つた風であります。實に怖ろしき民は猶太人であります。そして、彼等は世界で一番の愚直の民族であります。

第四章 精神統一と宗教經驗

一、瑜伽の意義

瑜伽とは一種の精神統一であります。然しそれは普通の精神統一と其の目的を異にして居ります。普通の精神統一は前に述べました通り、觀念の要求に従ひ、身體を自由に使用すること、換言すれば全身の筋肉を統一して、觀念の自己實現を完全に果すことを目的とするのであります。然るに瑜伽の目的は其處にありません。其の目的は肉の繫縛を超越して、自我と宇宙的實在との一致不二を自證すること、これを目的とするのであります。

凡ての心理學者は、精神なるものは腦髓皮質の化學作用から生れ出るも

のこ説きます。少くとも精神は腦髓皮質にねばり付いて居て、其處から一歩半歩も外に出ることの出来ないものこ説いて居ります。然し私はベルグソンと共に、此の説に反對するものであります。吾人の學説によれば精神の根元は——私はそれを靈と名づけて居ります——宇宙に遍滿して居るのであります。アインシュタイン氏は「空間は力なり」と言つて、空間に働きのあることを主張して居りますが、私から見ると、空間そのものが力ではない。空間に遍滿して居る靈が力なのであります。そして人間の身體は靈の内に浸されて居ります。丁度海綿が水の内に浸されてゐるやうな塩梅に、靈は身體を包み又その實質中に滲透して居ります。それで觀念とか、意識とか言ふものは腦髓皮質の化學作用によりて作り出されるものではありません。腦髓皮質は、否身體全部は靈の自己實現するための機關にす

きません。靈が身體を舞臺として自己實現する時、其處に觀念なり意識なりが發生します。然しそれは腦髓皮質の細胞中に閉ぢ籠められて居るものではありません。我々が山を見て、それを山であること認識するときは、山の觀念は、我々の身體と山とを包んで居ります。月を認識して居る時は、月の觀念は、我々の身體と月とを包んで居ります。だから意識は腦髓皮質中に閉ぢ籠められた主觀的實在でなくして、我々の身體の内にも外にも居る客觀的實在であります。吾人が吾人を圍繞する事物を主觀的事物として認識しないで、客觀的實在として認識し得るのは、之を認識する意識其の物が客觀的實在だからであります。

斯様に考へて見るに、我々の本質たる自我は、腦髓細胞の化學作用によりて作り出されたものではなくして、宇宙靈が我々の身體を舞臺として、其處

に自己實現したる姿にすぎません。宇宙に充滿してゐる光は、それ自體として不可見であるけれど、物質に反射するときは、色彩となつて我々の目で見ることが出来ます。丁度それと同じで、宇宙に遍滿する靈は、それ自身として不可知であるけれど、我々の身體に現はれる時には、我々の自我となつて認識されるのであります。色彩は物質によりて作り出されたのではなくて、不可見の光が物質を通じて自己の姿を見せたのにすぎません。それと同じで、自我は腦髓細胞によりて作り出されたのではなくて、不可知の靈が腦髓細胞を通じて、自己の姿を示したにすぎません。それであるから、吾人の自我は、吾人の身體内部に閉ぢ籠められて、宇宙の實在から孤立して居るものと思つてはなりません。丁度水面に浮ぶ水泡が、其の本質に於て、水と連りて一致不二であると同じやうに、吾人の自我はその本質に於て、宇宙の

靈を連りて一致不二であります。それで若し吾人にして、吾人の自我の本體を見究めんと思ふなら、吾人は吾人の身體から反射する靈の色彩にばかり執着してゐてはならない。吾人は吾人の身體を超越して、宇宙靈其の物を直覺自證せなければならぬ。それが正に瑜伽の目的であります。

瑜伽の目的は自我の本體、即ち宇宙の大靈を直覺自證することであり、そして其の方法は此の一念を堅持し、身體の繫縛を脱して、無念無想の境に入るにあり、斯くして到り得らるゝ所が、入我我入の境地で、西洋の學者は之を宇宙意識、或は神祕意識と言つて居ります。

印度の瑜伽哲學では、瑜伽を分類して(一)智慧瑜伽(二)信仰瑜伽(三)作法瑜伽として居ります。智慧瑜伽は、宇宙の哲理を研究し、それを觀法の對象として、瑜伽を行するのであります。信仰瑜伽は、宇宙の實在を神に信じ、そ

れを我我入することを目的として、瑜伽を行するのであります。作法瑜伽は禁欲、調息、制感等の作法によりて、瑜伽を行するのであります。然し、斯様に分類して見た所で、各自が一つ一つ孤立して行はれては、瑜伽の目的を果すことは出来ないであります。例へば何等の信仰もなく、何等の哲理もなくして、唯單に禁欲、調息、制感等の作法を行つたにて、それが宗教上何の役にも立たないのであります。又宇宙の哲理を如何程、明かに理解して居ても、宇宙の實在を如何程能く神であるに信仰して居ても、作法瑜伽を行じて、之を能く思念するのでなくては、宗教經驗はならぬのであります。だから三つに區別がしてあつても、實際に於ては、智慧瑜伽も、信仰瑜伽も、作法瑜伽によりて初めて宗教的行法となるのであります。だから瑜伽は、之を三つに分つよりも、智慧瑜伽と信仰瑜伽の二つに分けた方がよいと思ひ

ます。佛教の内、特に禪宗の如きは三界唯一心、心外無別法と言ふ宇宙觀を哲學的に建設し、之を坐禪によりて自證するのであるから、智慧瑜伽に屬するのであります。然るに眞言宗の如きは、宇宙を六大所成の毘盧遮那佛と信じ、三密瑜伽の行法によりて之を自證するのであるから、信仰瑜伽であります。けれど斯る宇宙觀を建設するに就ては、可なり面倒なる哲學的思索を用ふるのであるから、その點は智慧瑜伽であります。詰り眞言宗の瑜伽は智慧と信仰との兩方面を兼具するのであります。

二、瑜伽の實行方法

瑜伽の實行方法は、瑜伽派、禪宗、眞言宗、吠檀多派、其他種々の宗派によりて種々に分れて居ります。然し是等の實行方法を一々説明するここが出来

ませんから、唯瑜伽派と禪宗との方法だけを紹介することにいたします。

瑜伽派の所説によれば、人生の苦惱は神我(自我)が自性(物質)と結びついて居る爲めに生ずるのであります。神我が自性の繫縛を脱して、自由になれば、一切の苦惱を免れて平和であります。それで瑜伽派の瑜伽は、自性の繫縛を制止して、自我を自由にすることを目的とするのであります。而して其の實行方法は次の如き八段に分れて居ります。

(一)禁制(夜摩) これは不殺生、不妄語、不偷盜、不邪淫、不貪欲の五戒を行ふことで、修行者に与りて是非必要であります。吾人の良心に省みて、悪いと思ふことを行ふ時、それが修行者に取りて非常な妨害となるものであります。武士道では魔が差すと言つて、良心に反く行爲のある時は、それが如何程些細なことで、眞劍勝負の場合に活動の邪魔をするものであるとされて居

ります。撞球の名人が、女中に小言一つ言つた爲めに、大事の場合に不覺を取つたり、東京本所のキセン院の住職が自分でスツボンを殺したために、加持三昧に入り得ぬやうになつたことは、既に説明した通りであります。瑜伽に於ても其の通りで、之を修行せんと思はゞ、先づその準備行爲として、吾人の平素の生活状態其のものを、瑜伽に調和するやうに整理せねばなりません。一方で虚言を吐いたり、物を盗んだりしておいて、そして佛前で坐禪するやうなところでは、到底瑜伽の目的を達することは出来ないのであります。

(二)勸制(尼夜摩) これは清淨、満足、苦行、學誦、念神の五戒を守るところであります。禁制は道德上に關する五戒でありますが、これは精神の活動を整理するための心理的の五戒であります。清淨とは身體、衣服、居室等を清淨にするところで、精神を靜平にするために必要であります。満足とは衣食住の貧

弱に満足して居るところであります。苦行とは規則正しき作法を行じて身體を鍊るところであります。身體を懦弱に持ち崩すところは、精神の活動を調整するのに大禁物であります。學誦とは讀書によりて精神を鍊るところであります。雜談などは禁物です。信仰を固めるに必要な經典等を讀むところが必要であります。念神とは瑜伽の行法を成就し得るやうに、神明の加護を念ずるところであります。だから此の神は瑜伽の修行を助けるだけのもので、瑜伽の目標としての神ではありません。

(三)坐法 瑜伽を行ずるには、身體の姿勢を整ふるところが必要であります。爰に坐法と言ふのは、身體の姿勢を整ふる爲めの方法であります。瑜伽經には之について、左の如く説いてあります。

坐法は適意にして、確乎たるを要す。勸策を用ひず、悠然として自らを

無限に擴ぐる時、對比を脱すべし。

(四)調息 これは呼吸を整へるこゝであります。呼吸と身體統一との間には、非常に親密な關係のあるもので、呼吸を靜かに、規則正しくして居るこゝ、身體が自然に平靜になるものであります。

瑜伽派は呼吸の過程を滿相、虛相、瓶相の三つに分けて居ります。滿相とは空氣を十分に吸ひ込んで、胸腹一杯に滿たすこゝ、虛相とは空氣を吐き出して、胸腹を虚にするこゝ、瓶相とは水を瓶に滿たしたるが如く、吸ひ込んだ空氣を長く胸腹内に貯へて置くこゝであります。凡て呼吸は出来るだけ靜かに落ちついて行ふのであります。尙其の上に、吸ひ込んだ息が胸腹の何處に達したか、吐き出した息が、宇宙の何處まで届くかを注意するこゝ、出入充の息を一定するこゝが必要であります。

(五)制感 これは五官の働きを制止して、外界制較に對し無感覺となるこゝである。瑜伽哲學によるこゝ、自我(神我)は本來清淨にして常恒の靈體で、煩惱の汚れもなく、輪廻の苦みもないのであります。然るにそれが煩惱に汚れ、輪廻に苦むのは、詰り五官の經驗に繫縛せられて、物質(自性)の世界を自身と思ひ誤つて居る爲めであります。だから清淨にして常恒なる自我の實相を如實に見得せんが爲めには、先づ五官の繫縛から脱せねばならぬのであります。

(六)執持 これは呼吸こゝか、鼻端こゝか、丹田の如き個所に注意を集めるこゝであります。雜念を鎮靜するに必要な方法であります。

(七)禪那 これは執持の結果、心が無念無想の境に止住する事であります。

(八)三昧 これは瑜伽の目的地で、清淨にして常恒なる自我の實相を如實

に自知して居る境であります。

瑜伽派は以上の如き八段の方法を経て、物質の繫縛を脱して、自我の實相を徹見するに至るのであります。

次に禪宗では、楞伽經や金剛經に説いてあるやうな哲學的思索によりて、宇宙の一切現象を唯心所現の幻影と見て、三界唯一心、心外無別法と提唱します。然し宇宙の現象は幻影でも、之を生み出す一心其の物は常住不變の實在であります。此の一心を如實に見届けることを見性と申して、禪宗瑜伽の目的であります。普通人は此の幻影を實物と迷信して、それに囚はれてゐるから、其の根元たる寂然不動の一心を見届けることが出来ません。だから此の一心を見届けんが爲めには、無明の迷ひから醒め、幻影を幻影と知つて、其の繫縛から免れねばなりません。金剛經に

一切有爲法

如夢如幻影

如露亦如電

應作如是觀

とあるは、此の所を説いたものであります。天地間の一切現象を斯の如く幻影と認むることが出来れば、人生の苦惱も亦従つて消滅する筈であります。之を解脱と申します。それで禪宗の瑜伽は解脱と見性とに到らんが爲めの心理的過程と見るここが出来ます。

禪宗瑜伽の實行方法は謂はゆる戒定慧の三學であります。戒とは五戒或は十善戒の如く殺生、邪淫、妄語等の如き道德的惡行爲をなさぬ様に慎むことでもあります。其の或るものは身體の肉其の物を統一するのに役立ち、或るものは定の時に雜念を防止する役に立ちます。定とは坐禪を行つて雜念を一掃し、清淨不動の心地に到ることであります。慧とは三界唯一心、

心外無別法と一切有爲法、如夢如幻影と色即是空と、凡て宇宙人生に關する禪宗的哲理を靜慮して、無明に覆はれざる本來の心地を自證徹見するに在りてあります。詰り、戒によりて身體を調整して雜念の起らぬ様に準備し、定によりて清淨心地に入りて心性を見る準備をなし、最後に慧によりて愈最後の心性を自證するのであります。又八聖道と申して、瑜伽の方法を正見、正志、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八段に區分するに及ばないと思ひますが、其の區別が不正確で、三學の簡潔にして要を得たるに及ばないと思ひます。然し此の三學は總論的大綱にすぎぬのですから、愈之を實行する段になるに、もつと具體的の心得個條が必要になつて來ます。斯る心得個條に就ては、曹洞宗總持寺の開山、佛慈禪師の著、坐禪用心記が最も良い參考書であります。同書には、坐禪に關する實修上の心得が叮嚀親切に記述して

のります。其の大意は次のやうであります。

(一) 技藝を遠ざけるに在りて 歌舞、妓樂は勿論、術道、醫方、占相等は、すべて之を遠ざけて親まざるやうにするに在りて、肝要であります。是等は行者の心を亂し、精神の統一を妨げるからであります。

(二) 衣服は美服と垢衣とを用ひざるに在りて 美服は貪欲の心を生じ、盜難の心配あり。垢衣は衛生に悪しく、又精神を不快にするからであります。

(三) 食物は消化し易きものを適當に取るに在りて 不消化の食物を取れば、打坐に害があります。飽食して打坐するに、病氣に罹るに在りてあります。風藥を服して邪氣を拂ひ、胡麻、薯蕷等を食して、生を養ふに在りて、肝要であります。

(四) 交際を避けるに在りて 人に交際して種々の談話に耽けるのは統一に害

があるから、これを避けねばならぬ。特に禪師は國王、大臣、權勢家、欲深き人、名聞ある人、戯論の人と交際することを誡めて居ります。斯る人との交際は、虚禮虚儀に氣を配りて、精神の純眞を傷けるからであります。

(五) 演説説教を避けること 演説や説教は世人に利益を與へることで、善事ではあるけれども、瑜伽を行せんとする人は、之を避けるがよい。心を散逸させるからであります。

(六) 讀書は適度にすること 瑜伽の修行に利益ある書物は、少しく讀むは可なるも、多讀してはいけない。多讀は心を紊し、雜念を呼び起すからであります。

(七) 謙讓の徳を守ること 慢心は一切の肉身的自我を否定して、純粹自我の實相を見届けんとする瑜伽に取りて大障礙になりますから、之を一掃し

て無我とならねばなりません。私共が坐禪で悟りを得たこと自稱する、所謂御悟り屋に對して反感を有するのは、大抵は慢心者となつて、天下に自身程偉いものはないと思つて、世を茶化して渡るからであります。

(八) 慈悲を有つこと 大慈大悲の心を懷くことは、慢心を抑える爲めに必要であるのみならず、見性の實際的價値を高めるに必要であります。禪宗の行者は人生を唯心所現の幻影と觀するの結果、兎角世道に對する眞劍味を失ひ、一生を茶化して送る言ふ傾向を有つて居ります。左もなくば、彼は深山密林に遁れて、枯木寒巖の如き仙人生活を送ります。これでは、折角の禪宗も一向世道人心の爲めに利益となりません。けれども大慈大悲の心を堅持して、瑜伽を成就すれば、其の人は一切衆生の爲めに、菩薩行を營むやうになります。だから禪宗行者の小乘的悟道を矯正するには、慈悲の心を

持たせるこゝが必要であります。

(九)道場は閑靜にして心の散逸せぬ所を選ぶこゝ。坐禪する時は、俗塵を遠く離れた深山幽谷の叢林を選ぶが宜いこゝあります。高い所や風の烈しく吹く所は、發病の因となりて宜しくないであります。

(十)道場は清潔にするこゝ。不潔は病氣を起し、又心を亂すから、道場は清潔にして、香を焼き、花を献して置くがよい。

(十一)守護神の像を安置するこゝ。佛、菩薩等の像を安置して置けば、修行を害せんとする悪魔鬼魅の侵入を防ぎます。これは心理學上の問題で、悪魔、惡鬼の侵入は、潜在觀念が人格の虚に乗じて、瑜伽の行を邪魔するこゝであります。佛、菩薩の像に斯る悪魔、鬼魅を退ける威徳ありと信じて安置すれば、無論有効であります。

(十二)坐相を端正にするこゝ。身體の姿勢を端正にするこゝは、瑜伽の行法に最も必要であります。禪宗では厚き茵褥を敷いて、結跏趺坐、或ひは半跏趺坐するこゝになつて居ります。「坐禪用心記」には、之に就て次の如く説いてあります。

大抵坐禪の時は、袈裟を搭くべし。蒲團を略する莫れ。全く跏趺坐を支ふるにあらず。跏趺の半より後は脊骨の下に至る。之れ佛祖の坐法なり。或ひは結跏趺坐し、或は半跏趺坐す。結跏趺法は先づ右足を以て左脛の上に置き、左足を以て右脛の上に置き、而して寛く衣物を繫て、齊整ならしむべし。次に右手を以て左足の上に安じ、左手を以て右手の上に坐し、兩手の大指は相拄へて身に近け、柱指の對頭は臍に對して安すべし。正身端坐して左に側ち、右に傾き、前に躬ち、後ろに仰ぐこ

こを得ず。耳ミ肩鼻ミ臍ミは必ず俱に相對す。舌は上腭を拄へ、息は鼻より通じ、唇齒相着け、眼は正しく開き、張らず、微ならざべし。此の如く調身し已つて、欠氣して安息す。謂ゆる口を開き、氣を吐くこゝ一兩息するなり。次に、坐定つて、身を搖がすこゝ七八度すべし。麤より細に至り、兀々として端坐するなり。

(十三)氣息を調へるこゝ 坐禪して居る間に、身體が或ひは熱したり、或ひは寒くなつたり、或ひは滑になつたり、或ひは堅くなつたり、或ひは柔になつたり、或ひは重くなつたり、或ひは輕くなつたり、種々の變態現象を生ずるこゝがあります。これは氣息の亂れてゐる結果ですから、之を調へねばなりません。これを調へるに就て「坐禪用心記」には、次の如く説いてあります。

○ 調息の法は、暫らく口を開き張つて、長息は則ち長きに任かせ、短息は則

ち短きに任せて、漸々に之を調ふ。稍々之に随つて、覺觸來る時、自然に調適す。而して後、鼻息は通ずるに任せて通ずべし。

(十四)眠らぬやうにするこゝ 瑜伽を修行して、心が沈靜するこゝ、能く眠氣を催して來ます。然し眠つては、瑜伽の目的を果すこゝが出來ません。此の眠氣を拂ふこゝに就て「坐禪用心記」には、次の如く説いてあります。

○ 坐中若し昏睡來らば、常に身を搖がし、或ひは目を張り、又は心を頂上、髮際、眉間に安ずべし。猶未だ醒めざる時は、手を引いて、目を拭ひ、或ひは身を摩すべし。

右の如くしても、猶ほ睡氣の去らざるときは、經行かんぎん云つて、立つて歩行を初めるのであります。此の經行には、又一定の法則があります。之につき「坐禪用心記」には、次の如く説いてあります。

猶ほ未だ醒めざる時には、坐を起ちて經行す。正に順行を要す。順行して若し一百許歩に及べば、昏睡必ず醒めん。而して經行の法は、一息恒に半歩なり。行くも行かざる如く、寂靜にして動かす。

經行の法は先づ起き、左に歩み行き、行きつきた時には、右に轉じて歩み行くので、之を順行と申します。歩を移すこゝは極めて徐々として、一呼吸の間に半歩の割合であります。これは随分靜かな歩み方で、他から見ても、歩みてゐても歩いて居らぬやうで、寂靜不動であります。斯くても尙ほ睡氣の去らざる時は

或ひは目を濯ひ、項を冷やし、或ひは菩薩戒の序を誦し、種々方便して、睡眠せしむる勿れ。當に生死事大、無常迅速を觀すべし。道眼未だ明ならず、昏睡何んぞ爲さん。

生死事大無常迅速の八字は、永嘉大師が六祖慧能大師に初めて參した時の言葉であります。生死は大問題である。人生は無常近速にして刻々移り行く。道眼未だ明ならざるに、眠つて居る所では無いと、かう考へて氣を勵まし、眠氣を拂ふやうにするのであります。それでも眠氣の猶ほ去らざるこゝきは、佛祖の大悲に縋るのであります。

昏睡頻りに來らば、應に發願して、業習已に厚し、故に今睡眠蓋を被る。昏蒙何時か醒めん。佛祖大悲を垂れて、我が昏重の苦を抜かんこゝを願ふと云ふべし。

(十五)心の散亂を防ぐこゝ 坐禪用心記には、之に就ては次の如く説いてあります。

○心若し散亂するこゝきは、心を鼻端丹田に安じ、出入の息を數へよ。

これは注意を鼻端又は丹田に集中しながら、呼吸を數へて心を沈靜にするのであります。併し、吾人の經驗から言ふに、單に注意を鼻端や丹田に集中するだけでは、亂れた心を沈靜にすることは、なかく、容易ではありません。元來、心の亂れるのは、生理狀態の亂れに基くのであるから、之を沈靜にするのには、第一に身體の統一を行はねばなりません。それには、單に注意を丹田に集中するだけでなく、深呼吸を行ふが宜いのです。それは鼻孔から十分に息を吸ひ、丹田を脹大して固くなるまで力を入れ、そして極めて靜に鼻孔から息を吹き出すのであります。丹田に力を入れることが最も肝要であります。これを數十回行へば、心は沈靜になります。それでも猶ほ心の散亂止まざる時は、公案を考へるのであります。用心記には

猶ほ未だ休まざる時は、一則の公案を提撕して舉覺すべし。謂はく「こ

れ何物か、恁麼に來る。」「狗子無佛性。」「雲門の須彌山。」「趙州の柏樹子。」等の没滋味の説、これ其の所應也。

と説いてあります。「是れ何物か、恁麼に來る」とは、六祖慧能禪師が南嶽和尚に向つて提唱した公案であります。南嶽が初めて六祖に參した時、禪師は
什麼の處より來る

と問はれました。するに南嶽は

嵩山安國師の處より來る

と答へました。六祖は更に

これ什麼物か、恁麼に來る

と詰問しました。南嶽はこの詰問に行きつまつて、爾來八年間工夫したと云ふことあります。

狗子無佛性は趙州從德禪師の公案であります。或る僧が禪師に向つて

狗子還つて佛性有りや也た無しや

と問ふた時、禪師は「無し」と答へました。これを趙州狗子話と申します。雲門の須彌山とは、或る僧が雲門匡眞禪師に向つて、

不起一念還つて過ありや否や

と問ふた時、雲門はたゞ「須彌山」と答へました。これを雲門須彌山話と申します。

趙州の柏樹子とは、或る僧が趙州に向つて、

如何なるか之れ祖師西來の意

と問ふた時、趙州は「庭前の柏樹子」と答へました。これを趙州柏樹話と申します。

右の如き公案は何等の甘味も塩氣もない、丸で齒も牙も立たぬ話頭であります。かゝるものを念頭に掛けて工夫し出すと、自然に散亂した心が沈靜して來る筈であります。然しそれでも猶ほ散亂の休まぬ時には、如何様にすれば宜いでせうか。これに對して用心記には次の如く説いてあります。

猶ほ休まざる時は、一息截斷、兩眼永閉の端的に向つて打坐工夫せよ。

或ひは胞胎未生不起一念已前に向つて、行履工夫せば、二空忽ち生じ、散心必ず歇まん。

一息截斷、兩眼永閉とは、呼吸が止まり、兩眼永く閉ぢられるところで、即ち死ぬることであります。之を大死底の工夫と申します。胞胎未生とは、吾々が未だ母の胎内に宿らぬ時のこと。不起一念已前とは、善も惡も未だ一念